

井上円了の朝鮮巡講に関する資料

植民地朝鮮発行の記事を中心に

佐藤厚 *sato atsushi*

はじめに

近年、植民地朝鮮における日本の学問・宗教についての研究が盛んになっている。研究の基礎となる資料の復刻としては『日本植民地下の朝鮮研究』（クレス出版、二〇一二年）、『仏教植民地布教史資料集成【朝鮮篇】』全7巻（三人社、二〇一三年）が刊行されている。また研究の分野では中西直樹『植民地朝鮮と日本仏教』（三人社、二〇一三年）が刊行され、日本仏教の植民地朝鮮における具体的な活動のあり方とその意義が明らかにされている。

こうした中、哲学館（東洋大学の前身）創設者、井上円了（一八五八―一九一九、以下円了と略称）も植民地朝鮮における日本の宗教のあり方を考える際、重要な研究対象となると思われる。従来、円了の研究は日本国内における活動が中心であったが、円了が海外で行なった活動も重要である¹⁾。円了は、一九〇六年（明治三九）と一九一八年（大正七）に朝鮮巡講（朝鮮への巡回講演）を行なった。以下、一九〇六年のものを第一回巡講、一九一八年のものを第二回巡講と呼ぶ。特に二回目の巡講は、朝鮮総督府の囑託を受けて行なったもので、『教

『育勅語』を基本とする国民道徳を説いたほか、朝鮮人に対して日本への同化を説き、総督府の植民統治の思想と軌を一にしていた。

朝鮮巡講の基礎資料としては、円了自身が編集した『南船北馬集』第一編所収「滿韓紀行」（国民道徳普及会、一九〇七年）、同第一五編所収「朝鮮巡講第一回日誌」、「朝鮮巡講第二回日誌」（国民道徳普及会、一九一八年）、第一六編所収「朝鮮巡講第三回日誌」（井上円了研究）第三号（一九八五年）に収録）があるが、ここに集められた資料は、それ以外の新聞、雑誌の記事を集めたものである。

そもそも今回の資料蒐集作業は、東洋大学の三浦節夫教授から、円了の朝鮮における行動を示す資料の調査を依頼されたことから始まった。そして植民地朝鮮における新聞記事を調査し、これを資料としてまとめる過程で、三浦教授より新聞記事だけでなく現在では入手困難な雑誌記事も収録したほうがよいとのご指導をいただき、結果として、完全ではないが②『南船北馬集』以外の資料の集成という形になったものである。新聞は、日本の『中外日報』、朝鮮の『朝鮮新報』、『京城日報』、『毎日申報』の四紙、雑誌は、『東洋哲学』、『護法』、『朝鮮及満州』、『朝鮮教育研究会雑誌』、『教育時論』の五誌から記事を収録した。そして第一回巡講の記事として一六、第二回巡講の記事として五六の記事、合計七二の記事を収録した。

本資料の価値としては次の四点が挙げられる。

第一に、円了の巡講中の動きがわかることである。新聞にはリアルタイムで円了の動向が記されており、旅程の変更など、従来の資料ではわからなかった動向を把握することができる。

第二に、講演の具体的内容がわかること。第一回巡講では「迷信論」、第二回巡講では「心理的妖怪」、「国民道徳の大綱」、「国体の精華」、「東西両文明について」という都合五編の講演である。簡単に紹介すると、「迷信

論」、「心理的妖怪」は円了の妖怪学の成果であり、迷信、妖怪の非科学性を説くものである。また、「国民道德の大綱」、「国体の精華」、「東西両文明について」は、教育勅語による日本人の道德のありかたを説くとともに、それを日本により併合された朝鮮にも勧めるものである。

第三に、円了の朝鮮観がわかる資料となること。第一回巡講の報告に「朝鮮の宗教概観」（『中外日報』）、「満韓旅行談」（『東洋哲学』）、「朝鮮旅行談」（『護法』）があり、そこに円了の基本的な朝鮮観を見ることができると。一つだけ紹介すると、それは文明の国から遅れた朝鮮を見下すという姿勢である。その典型は、円了が作った漢詩の中で朝鮮人の住居を「豚小屋」と表現していることである。いくら実際に豚小屋に見えようと、それを直接言葉で表現していくところに、文明を背景とした円了の「強さ」が現れている。続いて第二回巡講の報告としては「鮮人同化―教育万能主義」（『毎日申報』）、「朝鮮視察管見」（『教育時論』）がある。これらはほぼ同内容であり、朝鮮人の日本への同化を主題とし、円了は教育の充実にこそ同化への早道であることを説いている。さらに、「開城より」（『京城日報』六月一〇日）、「毎日申報」六月二二日）では、日韓の合併は、兄弟である両国が東洋の再興をはかるための「天の使命」であるとして、合併の意義を説明する書簡を掲載している。

第四に、記者や一般の人の円了観を知る資料となること。例を挙げると、第一には国民道德確立に尽力する円了に敬意を払う見解である。第二回巡講の「井上円了博士を迎えて」（『京城日報』五月二八日）は、「博士よ、願くば、此の機会に於て、混沌たる思想界に、一道の光明を与へられよ。而して我が国民をして天壤無窮の国体と共に、朝日の匂う山桜の如く、花も実もある大和魂の所有者たらしめられよ」と円了に対する期待を示している。第二には「妖怪博士」として妖怪話を期待する論調である。第二回巡講の「妖怪博士妖怪を語らず」（『京城日報』五月二七日）には、妖怪に関心がある記者が円了に妖怪の質問をしたが、答が返ってこなかったことを記

す。「妖怪博士の朝鮮迷信談」（『京城日報』七月二三日）も、妖怪話に関心がある記者が妖怪について朝鮮の妖怪について訪ねたインタビューである。第三に一般の人の反応としては、第一回巡講の際に円了の講話を聴いた人の感想が「へなぶり」という当時流行した狂歌の形式で記されている（『朝鮮新報』十一月八日）。「靈魂を蓮根と聞くわからずや、ロハの聞物はわからねエと云ふ」。これは興味深く、貴重なものである。

このように本資料は、円了と朝鮮との関わりを示す重要な資料となるものである。これを土台として研究を進めていくことにより、円了と朝鮮との関係がより明確に見えてくるであろうし、円了の言行を同時代の他の資料と比較することにより、植民地下朝鮮における日本のあり方もより見えてくることが期待される。

〔凡例〕

本資料は、一、一九〇六年（明治三九）の記事と、二、一九一八年（大正七）とに分けた。それぞれ最初に記事を一覧表にまとめ、続いて媒体についての簡単な説明を付し、最後に記事本文を出した。

記事の収録・整理は次の方針によった。

- 一、記事は刊行年月日を基準として配列し、番号を付した。
- 二、記事の漢字の旧字体は新字体にした。
- 三、記事の多くには振仮名が振られているが、難読字を除き振仮名は付けない。
- 四、判読できない文字は■で示した。
- 五、記事によっては内容を説明するための注を付けた。

一、第一回朝鮮巡講（一九〇六年（明治三九年））の記事
 〈二覽表〉

番号	刊行月日	媒体名	見出し
一	一九〇六年 一〇月三〇日	中外日報	井上巴了氏
二	一〇月三〇日	朝鮮新報	井上氏の講話会
三	十一月二日	朝鮮新報	井上博士の入京
四	五日	朝鮮新報	井上博士の講話会
五	六日	朝鮮新報	井上博士講演会
六	六日	朝鮮新報	仏教講演会
七	八日	朝鮮新報	時事へなぶり
八	九日	朝鮮新報	迷信論
九	一〇日	朝鮮新報	迷信論（二）
一〇	一三日	中外日報	平壤に於ける井上博士
一一	一三日	中外日報	滿韓巡遊の井上博士
一二	一四日	中外日報	漢詩
一三	一二月二日	中外日報	井上巴了博士の消息
一四	一九〇七年 一月一日	中外日報	朝鮮の宗教概観
一五	一月一日	東洋哲学	滿韓旅行談
一六	五月一〇日	護法	朝鮮旅行談

〈媒体〉

- ・『中外日報』…一八九七年（明治三〇）に創刊され、現在も継続している日本の代表的な宗教情報新聞。
- ・『朝鮮新報』…一九〇六年（明治三九）から一九〇八年（明治四一）に日本統治時代の朝鮮・仁川で、朝鮮新報社が発行していた日本語新聞。後に「朝鮮新聞」と改題。
- ・『東洋哲学』…一八九四（明治二七）に創刊され一九二六（昭和元）まで継続した東洋学および東洋大学に関する情報を収録した雑誌。発行所は東洋大学東洋哲学会。
- ・『護法』…明治中期に創刊された曹洞宗を中心とする仏教雑誌。発行は鴻盟社。

〈記事〉

〔一〕一〇月三〇日『中外日報』「井上円了氏」

井上円了氏 去二四日韓国釜山に着し昨今京城に入りし筈なり

〔二〕一〇月三〇日『朝鮮新報』「井上氏の講話会」

井上文学博士来韓のことは既報せし所なるか、仁川港教育衛生会に於ては一夕、氏を招待し右に関する有益なる講話を請う筈なり。

〔三〕二月二日『朝鮮新報』「井上博士の入京」

先日來、釜山滞在中の井上博士は本日を以て鉄路入京の筈。

〔四〕二月五日『朝鮮新報』「井上博士の講話会」

滯京中の文学博士井上円了氏は、明六日下仁、当地有志者の懇請により本願寺別院に於て一場の演説をなす由。

〔五〕二月六日『朝鮮新報』「井上博士講演会」

本日午後六時より仏教各宗徒の催しにて文学博士井上円了氏の講演会を本願寺仁川別院に於て挙行する由。尚同博士は書に巧なるが需に応じ些少の摺筆料にて揮毫すべしと。

〔六〕二月六日『朝鮮新報』「仏教講演会」

今六日午後六時ヨリ於本願寺別院

仏教講演会

講師 井上円了博士

発起者 仏教各宗協会

〔七〕二月八日『朝鮮新報』「時事へなぶり」

円了博士の講演 天法螺

靈魂を運根と聞くわからずやロハの間物はわからねエと云ふ

〔註〕※へなぶり…流行語などを取り入れて詠んだ新趣向の狂歌。明治三七〜三八年〔一九〇四〜一九〇五〕

ころ流行した。「ひなぶり」「夷曲」をもじっていった語。

※ロハ…「無料」「タダ」を意味する言葉で大正時代から昭和初期にかけて流行った若者言葉。

〔八〕二月九日『朝鮮新報』「迷信論」

迷信論

文学博士 井上円了氏談

一昨七日、教育衛生会の為民役所樓上に於て全氏の講演ありたるが、本題の前に精神修養に就て論ぜられたるも都合に依り本論を先きに掲載することとせり。乞う諒せよ。文責は一に記者にあり。

迷信といふことは近頃文部省の小学校の国定教科書を編纂される時に項目を掲げて中に加わつたのであるが、随分甚しい迷信が我国にあるので特に注意して種々調査の上加はつたことと思ふ。

迷信は何処の国でもある。西洋の所謂迷信といふのは今日に於て皆無と云つてよろしい。彼国では金曜日といふことを非常に忌むけれども、これは迷信でなく金曜日は基督が磔刑に処せられた日だから之を厭ので、宗教の上から云へば、宗祖を思ふ精神から出たのであるから純粹な迷信ではない。翻つて東洋の方では種々雑多の迷信があるが、他国は先づよしとして教育の進歩の程度などに於て諸外国に譲らぬ文明国に似合ずして迷信なるものが非常に多い。茲こゝに一々挙げて話すことは出来ないけれ共、要するに迷信は心の迷ひより起るので、人間が一生の旅路を渡るうちに病魔災難に罹ると色々な迷ひが起る。其迷ひが集まつて迷信となるのである。

近頃私は考へて居ることがある。夫れは学校教育に於て如何程いかほど、迷信を打破せんとしても家庭教育で之を打破

することに勉めねば、到底迷信といふものは消ゆるものではない。然るに現今、家庭教育の有様を見ると、種々な迷信を子供の心に植付けて居る。我国では迷信が数多くあるが、例を挙げて見ると、今年は丙午ひょううまであるので世間の者は云ふて居る。大水がある、大風がある、大火事がある、丙午に生まれた子供は人に害をなす、気が強過ぐる、人を殺すなどと云つて居る。或処では、今年児が生れても役所には届出ずして来年届けようとする処があるが、茲より以上甚だしいのは今年は墮胎が多いのだ。こんなのは実に迷信の極である。丙午が何故悪いかと云へば、此は昔の五行から出たもので十干のうちで丙の方は■に當つて居る。即ち何の彗何のといふのは、彗は兄でとは弟である。丙はひの彗であるから兄である。又午は巳の柔に反して非常に強いとしてある。だから強いものが二つ相会ふたから強過ぎてよくないといふのだ。

今日に於ては、万物の元素があつて世界はこれで成立つて居るといふことがわかつて見ると、五行などを信ずることが出来ぬ。これを信じて居るとすれば教育の足らぬのではあるまいかと思ふ。

よく方角に就て迷信を抱く者がある。然るに此方角なるものが既に定まつて居らない。スペインサーが方角のことに就て説いたことがある。「地球は東の方に向つて廻転して居る。然るに今、西の方に向つて汽船が進行して居つて其甲板を人が東に向つて歩んで居るとすると、人は東に歩いて居ると思ふて居るけれ共、船は西に進行して人も西に行きつゝある。又船は西に行くと云ふても地球は東に廻転して船も又之に伴つて居る。だから方角なるものは無い」と云つて居る。実に其通りである。

又方角に就て金神鬼門を非常に忌む。之れが又滑稽である。鬼門は支那の漢時代の小説から出たとのことで支那の東北に當つて鬼門嶋があるといふのだ。故に其方角を厭つて居る。又た金神といふのは日本のホキナイ伝といふ本の中に何処の昔話か知らぬが伝へてある。日本の南方海上三万里の処に夜叉国があつて其島には沢山鬼が

棲んで居る。其鬼の王にコクンといふのがあつてコクンが金の性だから金神といふのだ。其金神が日本に仇をなすといふてある。考へて見ると実に滑稽である。三万里の南と云へば地球の外に出てしまふではないか。

其他、狐つき、河童つき、幽霊つき「死霊とか生霊とか」皆迷信である。此つき物については度々取調べたことがある、今茲（こゝ）に事実を二参に話したら分ると思ふ「未完」

〔九〕二月一日『朝鮮新報』「迷信論（一）」

迷信論（二） 井上円了氏談

我が関係したのは東京京橋区の或る町内に化物が表らはれた。処が其怪物は箆笥の中に入れてある着物を皆切つてしまふので錠を下して置いても切る。サア大騒ぎとなつた。其上此家には狐の足跡があるので、愈いよく狐の仕業なるほどは切れて居る。又足跡も調べて見ると、天井などについて居る。然し私はどうも狐の仕業と信ずることが出来ない。第一足跡が不審である。外より狐が泥足の俣、■より上つたとすれば、順を追ふて跡がある可き筈であるのに、夫れが皆天井について居る。能く調べて見ると、■の跡でなく人間の指の跡といふことが分つた。夫れから家族を調べて見ると、親類より■つた一人の娘がある。夫れがどうも怪しい。で其場では発表せずして帰宅した後、手紙で云ふてやつたけれども主人は一向信じないので、試に其娘を二三日遠ざけさせた処が果して私の思ふ通り決して着物の切れるようなことは無いようになつた。後日主人が礼に来て、実は気がつかなくなつたけれど、あの娘であつたと話して居た。斯ることをするのは何か目的があるとか怨みがあるとか云ふのでは決してない。精神の一種の状態で、人間の精神が或場合には人が驚くやら怪しむのが面白いと云ふ或一点の考えが変な状態の

ものがある。夫れを見た方の者は何か意趣か遺恨があるように思ふが、夫れは間違で一方は只一種の興味を以てやるのである。

夫れから天狗のことに就てであるが、一昨年、甲州のかじかざわ鵜沢の或者が不図、家を出て三十里隔つた親族のうちに行き証拠物を持つて翌日歸つた。夫うして其間は山道で人力車もなく汽車も通はぬ処なので、世間の者は天狗に連れて行かれたと云ふ。大騒ぎをやつて居る。私がちやうど恰度其附近に滞留して居つたので能く調べた。

然しこれは決して驚くに足らぬことである。此頃東京に速歩術と云のがある。此を研究すると、一日で以て東京から鎌倉に往來が出来る由、其方法を一寸聞いて見ると、秘伝は只足で歩くな腹で歩けと云ふのだ。腹で歩かうと思ふと足が早い、足で歩かうと思つと足が疲れてしまふ。だからこんな修業をするとのことである。日光迄三十五里あるが、此術を修めた者が一日で到着することを実験した。すると今の天狗のつuitたと云ふことは何も不思議でない。

精神が普通の状態にある時は四方八方に働いて居るけれ共、一方面に精神が集注すると強くなるものだ。即ち狐つきに人の二三倍の飯を食ふことがある。此れは畢竟、生理上の力が一点に集まつたから、これだけのことが出来るのである。

かかる迷信は如何なる物が其基因となつて居るかと云へば、皆昔むかしはなし噺が土台である。何か心配事があるか病氣などに罹ると、幼時より脳裡に印せられて居る迷信のために遂に気が狂つてしまふのである。然しそれを周囲の者が押しつけてをけばよいに頻にヤレ狐つきだとか、ヤレ天狗がついたなど、と煽おごてるものだから、愈いよく本人はそれになつてしまふのだ。こんなのは皆家庭教育の不完全から起るので、大に矯正せねばならぬ事である。我国の家庭では種々な妖怪談などが聞かせてあるから闇を恐れるけれ共、西洋ではよし化物か話に出ても皆滑稽じみ

た兒童に親しみ易い化物なので、少しも暗夜小便にゆくなどのことを恐れない。

どふしても此れを矯正せねばならぬが、只理屈ばかりでは不可能である。心の据はるやうにせねばならぬが、夫れは宗教の力を借らねばならぬ。教育の方では知情意と分けて、而して教育してあるが、此三つの心の始めに此心の土台になるものがある。

即ち教育で精神の修養をし、宗教で其土台の修養をせねばならぬ。此二つが相俟つて、始めて如何なる難儀に逢ふも人間一生の旅路を渡る間にも決して物事に動せぬものとなれるのだ。私は教育と宗教が一致すれば完全なる教育なるものが出来ると断言するものである。〔完〕

〔二〇〕十一月三日『中外日報』「平壤に於ける井上博士」

去る八日平壤に入り九日小学校に於いて講話をなし十日同地を出発せり、

〔二一〕二月三日『中外日報』「滿韓巡遊の井上博士」

滿韓巡遊中の井上円了氏は、去る二日釜山より京城に來り、倭城台本願寺別院に投宿せしが、同地にては井波輪番、和田民会議長、横山小学校長、俵書記官、黒田通訳官、山口商業會議所会頭、菊池謙讓、目賀田顧問、三浦理事官、森勝次等の發起に依り、四日午後京城小学校に、五日午後、本願寺別院に於て講話會を開催せり、何れも滿場の聴衆にて頗る盛会なりき、五日講話會終りて茶話會を催す、列席者数十名、各自宗教の感念、將た精神上の疑團に付、快談笑語、歡を尽して別る、博士は六日、王城を拜觀し仁川に向て出發したり〔京城特信〕

〔二二〕十一月一日『中外日報』〔漢詩〕

○天長節

菊花時節客韓中 欲祝天皇帝祚隆

幸有漢穀和酒在 終南山下醉秋風

○韓京迎天長節

今日鷄林喜色多 即知八道浴恩波

朝來祝得天皇壽 穀是清韓酒是和

○京城行

鷄林八道稻田平 水態山容動客情

一路霜風天已暮 鐵車載月入韓京

○祝本願寺落成

和城台上大堂遮 压得韓京百万家

八道人民誰不仰 滿庭燦爛菩提花

○為井波潛竜師賦此詩以贈

潜竜飛躍過山河 影落井中水起波

久在北溟降甘雨 又来韓地弘諸魔

〔二三〕二月二日『中外日報』「井上円了博士の消息」

同博士は先月来長崎県下を巡遊中なりしが其後韓国に渡り諸処にて講話をなし、客月二十三日には清国大連なる遼東新報社の主催にかゝる同社第一回講話会に臨み内藤湖南氏と共に一場の講話をなしたりと、

〔二四〕明治四〇年〔二九〇七〕一月一日『中外日報』「朝鮮の宗教概観」

○朝鮮の宗教概観 文学博士 井上円了氏談

朝鮮の宗教を一口にいはず、死に頻せる哀むべきものであるといふの外ない、斯様な状態になつたのは、今の李朝からで、京城には一個の寺院も僧侶もない、之は李朝になつてから、非常に僧侶を卑んだからです、

其卑しむに至つた根原といふものは実に愚々しい訳で、朝鮮の習慣に父母が没すると、三年の喪を厳しく行ふのである、其三年間といふものは、夫婦たるものは同衾が出来ない、若し此の喪中に子が産れたならば、其子供は非礼の児として、誰一人交際するものがない、そこで万止むなく僧侶にするのである、

斯る非礼の卑しまるゝ児が僧侶となるために、遂に一般人民より卑しまるゝ様になつて、遂に宗教なるものは地を掃ふの可憐なる状態となつた、

けれども寺には皆相当の財産があつて衣食には何の差支もない、私の行きました牡丹台の永光寺といふ寺の如き周囲五里四方の山を所有して居るといふ勢であつた、

其寺に日本僧侶の旭氏が居ましたから、どうして居るか尋ねた処、名義は一室を借りて居るのだが、其実全権は旭氏が掌握して、実の住職は虚名を擁して居るのださうで、其旭氏が中々野心を抱いて居て、平壤から二三里の処に立派な寺がある、其寺院を占領せんと計画ださうだ、

此の占領という事は尤もよい事と思ふ、何故といふに、到底、朝鮮僧では仕方ありませんから、卑下を受けない非礼の児でない堂々たる日本僧が占領すれば、大に朝鮮の宗教を挽回する事が出来様と思ふ、

然らば朝鮮の寺院なるものは何の用に供するかといふと、葬式にも法事にも用ゐない、葬式などは親類のものが集つてやるので、僧侶は何の關係がない、唯茫然として旧式の礼拝位をやつて其の日を暮して居る、

併し只一つ人民が寺へ頼みに来る事がある、何にを頼みに来るのかといふと、官吏になりたいから祈祷してくれといふので、朝鮮は官尊民卑であるから、官吏になる事を非常に希望して居るので、其の結果は祈祷を頼みに来るのだが、其の愚さ加減は御話しにならぬ、

〔二五〕明治四〇年一月一日「滿韓旅行談」(『東洋哲学』一四一、五一頁—五五頁)

滿韓旅行談 井上 円了

東京を出ましたのは夏の初めでありました、先づ讚岐に渡りまして一ヶ月半ばかり居りまして、次に長崎に渡りました、佐賀県は御存じの通り島と半島とから成つてをりますので陸地の面積はさほどでないが、海岸線は日本第一といふのであります、それでどこへ行くにも便船によらなければならぬので大に日数がかゝり二ヶ月ばかりかゝつて全体を巡廻めぐりまわしました、それから朝鮮に渡りました、これは予定して居つたではありませんでした、が長崎まで行つたものですから、今少しだとおもつて朝鮮に渡つたのであります、朝鮮に渡りますと、今一歩進

めて満洲に入らうと思ひ立ちました、ところが服装は夏のものしかありません、それに朝鮮に入りますと、よほど寒さが強くて、京城に天長節を迎へたが朝などもはや氷がはつたほどでありました。安東県に向つた汽車中も寒風がつよくつて耐へられませんでしたので防寒の用意をしました、安東県に参りましたときはまだそれほど寒くもなかつたのですが鴨緑江の流れもまだ凍つて居なかつた位でしたが、奉天行の道中の寒さには閉口しました、汽車は屋根がありません、支那人は蝙蝠傘をさして居ましたが、是れは日除けの為でなく風除けの為であります、私は兵站部の優遇を受けまして特別に屋根のある汽車に乗ることになりました、しかし一人きりのものですから却つて寒くつてなりませんので途中で其由を話して火鉢をもらひました、火鉢といふのは缶詰のあきがらす、それを足の間にはさんでやつと寒を凌ぎました、奉天にては零度以下十八度まで降りました、鉄嶺などは大抵いつも其温度でつゞきました、夫故、それより北へは進まずに引返しました、普通の外套では寒くてなりませんので支那外套に支那靴、朝鮮足袋といふ風でやつて参りました〔此時博士自ら其装ひをせらる〕奉天以北は通常の汽車があります、戦争当時の偽まがの設備ですから寒いことは甚しいのです、鉄嶺では極寒が零下三十度乃至三十二度といふことであります、私の行つた当時が零下十八度でしたから略想像がつくのです、歩いてをれば温まりまするが停止すれば寒さに耐へられません、これから朝鮮のことだけをおはなしいたしませう、

支那と朝鮮と日本とを比較すると文化東漸の跡が能くわかるのであります、これが支那下駄、これが朝鮮下駄、これが日本下駄であります〔各実物を卓上に並べて〕是は一例であります、すべてのが斯様に変遷して来たのであらうと思はれます、即支那にて其手本を考へ出したの朝鮮に入りて却て天然に近くなり日本に渡りてが漸く美術的となり且軽便となつたのであります、朝鮮旅行についての所感は此間学長の許へ送つた二篇の詩についてお話し致しましたら彼地風俗の一端を測ることができやうと思ひます、

自入朝鮮僅一週 四辺事物射吾眸

白衣載帽如神葬 青被纏身似鬼游

豚小屋中家族坐 土饅頭下祖先休

口銜長管吹煙処 可見韓民意氣悠

尋到朝鮮八道亭 欲觀風俗暫時停

腰頭運水石油缶 車外壳茶麥酒瓶

屋晒唐辛半村赤 山留松葉一分青

韓人雖漫誇儀札 臭氣滿家衣亦腥

白衣云々、朝鮮に渡りて先づ注意を惹くは白衣の人であります、おもうに神葬祭の如きも朝鮮の風俗から来たのでありませう、

青被云々、主として京城の女子であります、日本でいふところのカツギはこれから来たのでありませう勿論、其最根本は印度の風俗であるかと思ふ

豚小屋云々、家屋は至つて粗末です、多くは手製で、大工や左官など専門的職工を雇ふことは極めて少ない、只防寒の用意だけは相当に出来て居ります、之には原因がありまして、平民の住家は普通に一間は八尺四方に限られてあります、門を建てることは出来ません、少し家を立派にすると御用金を申し附けられる、斯様に国家の制裁のあることが即家屋の粗陋なる原因であります、此の様な狭い家に住つて居る朝鮮人の体格は如何といへば

中々立派です、支那人よりもよいといつてもよろしい、風采も立派です、然るに家はとても支那の家とは比較になりません、支那には立派な家があります、鴨緑江を限りて大に差があります、すると家の大小は其中に住む人間の体格に影響して居らぬといふ結論が導かれます、然らば日本人の体格の小なるは何故であるか、成程日本の家は矮小であります、しかし朝鮮の家屋に比すれば遙かに勝つてをる、朝鮮の家は出入口が四尺位しかありません、体をかゝめて出入するのです〔日本の茶席が朝鮮から来たといふ説がありますが、或はさうでありませう〕而して体格は大であります、すると日本人の体格の小なる下人は他になければなりません、日本人は子供のときから坐る習慣があります、韓人は小さき家の中に悠然としてアグラをかいてをります、而して人の身長の場合何は重に足部の発達の如何によるものでありますから、日本人の体格の小なるは坐る習慣に基因するのではないかといふ感じがするのであります、土饅頭云々、到る処にあります、墓地です、身分のある人は石碑を建てますが、一般人民は石碑を建つることを許されませんが、

口銜長管云々、煙管の長さは九尺もあるのがあります、歩行するときには腰にさしてをる、長管を銜んでボンヤリと立つて居るところ大に瞑想してをるが如くにして実はさうでないであります、

腰頭云々、桶は少い、木を刳つてこしらへたものがありますが、籠を嵌めたものはありません、石油の鐘を之に代用します、腰にて棒を支へ両端に鐘を吊るして水を運ぶのです、各戸井をもつて居るといふやうなことはありません、

車外云々、茶を用ひない、飲を炊いたあとへ湯を入れて飲む位で食後に茶を用ふこともなければ客に茶を進めることもない、従つて茶器が無いので麦酒の瓶にて茶を売つてをります、

屋晒云々、山は赭山で紅葉の眺めはありませんが、屋根一面に干して居る唐辛は恰も之を補うて居る観があり

ます、

山留云々、木の根まで薪にするので樹木といふものは何もない、唯僅かに墓場旧蹟などに松の残つて居るのみであります、支那では松を縁起のわるいものとしてをる、蓋し墓場のしるしであるからであります、朝鮮には墓場とても必ず松があるといふことはありません、

誇礼儀、儀礼を得意としてをる、威儀風采をやかましくいふ、鏡櫛などを常に携へて居る、彼らは上衣のみは幾度も洗濯する、砧声到る処に聞ゆ、然るに家は不潔である、臭気も高い、しかし彼等の言ふ処によれば日本人にも一種の臭気ありといふ、即鬻油臭いといふ、されば臭気によりて何れの国の人なりやを嗅きわけることが出来やうとおもふのみならず、階級の差も弁別することが出来やうかとおもふのであります、

最後に一言申して置きたいのは、朝鮮は如何なる方面にも大に開拓の余地があるから我が東洋大学に学んで居る人などは朝鮮満洲地方に渡つて活動するがよからうかとおもひます、彼地に渡れば内地とは違つて、何よりも風采が肝心である、体格が大きくて鬚の多い人は最も良い、着物を綺麗にすることが必要であります、

宗教の方面については、彼の地の寺は古代の建築物が残つてをるのが多い、中には我邦の高野、本願寺なども遠く及ばない程のものが少なくない、財産も沢山ある、しかし僧侶は卑しまれる、法事も葬式も一向関係がない、唯寺にでも参るといへば官に就かんことを務る位なことである、朝鮮には道德の制裁が全然ない、是れは宗教を蔑視した結果かとおもはれる、孔孟の教なきにあらざるも其は唯虚礼に過ぎないので其の精神は全く失はれてしまつてをる、山も川も殺風景である而して宗教はない、良心の修養の出来る筈がないのであります、それで彼の地の人民の風を化し俗を移すには宗教の改良が最も必要であらうかとおもはれるのであります、ところが其改良は朝鮮の僧侶には到底望むことが出来ない、彼等にはそんな気概がないのであります、それで我が国より渡

つて彼地の宗教を改良するといふことは最も必要なことであると思ふのであります、既に臨濟宗の某は平壤の或寺に住職となつて居ります〔同窓会講話筆記〕

【注】これは明治三十九年十二月十三日に開かれた東洋大学記念会の席上での講演と思われる。本文と同じ『東洋哲学』報道欄には「午前には九時より井上先生の満韓旅行談」〔九一頁〕とある。

〔二六〕明治四〇年五月一日「朝鮮旅行談」〔護法〕第二〇年第五号、二二頁・二五頁〕

朝鮮旅行談 文学博士 井上円了

第一、山色

余は昨年十月下旬に渡韓致したるが、其道順は対州より釜山へ向けて乗船した、即ち対州巖原を発船したる時は夜中十二時にして釜山に到着したるときは、翌朝の八時でありました、旭日の船窓に映ずるのを見て目が醒め、甲板に登りて見るに、釜山の山が目の前にあらはれて居る、兼て日本では朝鮮の山には樹木なしとは聞き居たれど、其山がいづれも一本の木も草もなく赤土の裸体を顕はしてあるのは、実に予想外にて大に驚きました、熱帯地方へ行つて見るに、たとへば新嘉坡シンガポールでもセーロンでも、人間は裸体の殺風景を示すも、山は草木の衣装を着、花葉の紅粉を装ひ、美しき姿を顕はして居るが、朝鮮は之に反対にて、人間の方は白衣を着、黒帽を戴き葬式か祭典の如き体裁であるが、山の方は全身に衣冠は勿論、足袋も腰巻もなく、マルパダカであつて実に殺風景を極めたる有様である、其時たま／＼旭の光が山に映じ、赤土より反射して銅の如くに見えました、先年亜拉比亞アラビヤの亜丁港アドンに着して山に一根の草木なきに驚いたことがあるかも、亜拉比亞は雨なき国なれば致し方ないが、朝鮮の五風十雨、地味膏腴にして此殺風景を見んとは、余が旅行中の第一驚でありました。

第二、住居

次に釜山より京城に至るの間、道すがら韓人の家屋を見るに、兼て聞きし如く豚小屋と異なる所なく、未開野蠻の居宅であるが、唯驚くのは斯る矮小の家屋に住しながら、人の体格の意外に長大なる一条である、若し体格の点を以て比較を取らば朝鮮人は遙に日本人の上にあるは勿論、支那人よりも却て優りて居るかと思ふ、余は曾て人の体格は其住家の大小に關係す、日本人の身だけの低きは、其家の構造の低きに幾分か原因すと論じたることとがある、西洋の家の戸口は鴨居の高さ大抵七尺にして、室内の天井も至て高いのに、我邦の鴨居は五尺八寸にして、天井も一般に低い方である就中茶席の如きは戸口の高さ四尺五寸の極りである、斯る矮小の家屋に住する故に日本人の身長も自然に低くなると考へたことがあるが、其後愛蘭土アイランドに行きて民家を見るに、入口の高さは五尺位が普通である、室内も之に準じて低い、然るに体格は日本人の比でない、此時に人身の長短は家屋の大小に關せぬものと思ふたが今度朝鮮の家屋を見て一層日本人の小なるは家屋の為にあらざることが明かになつた。

第三、日本人の体格

然らば日本人の体格は何によりて斯く小なるや、必ず其原因がなくてはならぬ、食物ならんかといふに日本人は従来あまり肉類を用ゐず、蔬食をする風あるも、朝鮮人として強ち美食するにあらず、豚の如きも平日の食ではない、農民は大抵皆蔬食である、唯我日本人は他国人に比して多量に魚類を食するも、魚類が体格の原因となることは信じ難い、其故は日本人にても深山の間に住するものは魚類を食することなく、海浜の人は毎日魚類を食するが、さりとて海浜の人の体格が小にして、山間の人は大なりとの実例もなからうと思ふ斯く論じつめて見ると、日本人は平常坐する習慣あるのが主として身体の発達を妨げたることに帰するであらう、朝鮮人は室内にあ

りては坐するに相違なきも、アグラをかき坐し決して我邦の如く正しく坐するにあらず、且つ人の身長は重に足の長短によりて異なるものなれば足をして自由に発達せしむる様にすれば、身長も高くなる道理である、然るに日本人の坐する習慣は足の発達を害することは明かである、されば日本人の身長の高さは主として畳の上に正座する習慣に原因すると申して宜しからうかと思う。

第四、我邦上代の風俗

日本の文明は朝鮮より伝へたりしものゝ多きは疑なき事実である、故に朝鮮に入りて万般の事物を見るによく日本人に似たる所あるを見、又知らず識らず我邦上古の状態を實現することが出来る様に思はる、而して朝鮮は上代の俣を伝へて更に改良変化を加へざるも我邦は種々の方面に於て発達を來したる為に、兩國の間に異同を見るに至りたる次第である、朝鮮の宮殿や寺院を見るときは、直ちに我邦の神社仏閣等の古代の建築を想出することを得、朝鮮人の衣服を見ても同様である、男子の白衣を着したる婦人のカツギを被りたるなどは、我邦の葬式を見ると少しも変らない、朝鮮の葬式のよく我邦の祭典の神輿の通行と同じいとて驚いた人もある、又朝鮮人の家屋も八尺四方を一間と定め窓の如き処より出入する風あるは我邦の茶屋に同じいとて驚いた人もある是れみな朝鮮風の伝はりたるに相違ない、然るに茶室と朝鮮家屋とはよく似たる間に大に異なる処あるは、ツマリ我邦の方に於て改良を加へたる証拠である又朝鮮には我邦の所謂桶なるものがない朝鮮の桶は木をくりたるものである、決して我邦の如くタガをはめたるものはない、又朝鮮の下駄は木をくりたるものにして、我邦の如く齒を入れたるものがない、此一例にても知らるゝ如く、最初の意匠は朝鮮より学び来りしに相違なきも、我邦にて種々の改良発達を加へたることは争はれぬ事実である。

第五、朝鮮人の無趣味

朝鮮は一般に無趣味、無風流、殺風景を極めて居ることは、彼地に遊ぶものゝ第一に感ずる所である、是れ自然の勢にて止むを得ない次第である、其訳は山でも川でもみな風景を欠いて居る、余が車中の所吟の如く川皆枯渴山皆瘦、满目蕭々韓國秋、の有様であるからして、風流の考を養ふ手掛りがない、又人家に至りては豚小屋同様なれば、庭園の設けもなければ、室内の裝飾もない、又た絵画音楽彫刻等の美術もない、之に加ふるに理想上の美を吹き込む所の宗教もない、処によりては堂宇伽藍の壮大なるもの現存せるも、之に住する僧侶は布教伝道せざるのみならず、一般に世人より擯斥せられ、葬祭の儀式すらも行はぬ有様である、稀に参詣する人あるも、其目的は自利的祈願を行ふに過ぎぬ、例へば官吏役人になりたい為に祈願に出掛るものが多いとのことぢや、されば人間として風流風雅の思想の起る筈はない、故に多数の者は唯だ醉生夢死禽生獸死の境界を送ると申して宜しからう、若し^{さかのぼ}汜りて数百年前の古代文化隆盛の當時を回想し来らば韓國の^きため一掬の涙を^ま濺がざるを得ない次第である。

第六、朝鮮人の風俗

朝鮮人の風俗中、一見異様に感ずる点は、余が朝鮮所見と題したる七律二首にて尽くして居る、左に更に掲げませう。

自入朝鮮僅一週 四辺事物射吾眸
白衣載帽如神葬 青被纏身似鬼游

豚小屋中家族坐 土饅頭下祖先休

口銜長管吹煙処 可見韓民意氣悠

尋到朝鮮八道亭 欲觀風俗暫時停

腰頭運水石油缶 車外壳茶麥酒瓶

屋晒唐辛半村赤 山留松葉一分青

韓人雖漫誇儀禮 臭氣滿家衣亦腥

要するに韓人は數百年間、何等の進歩もなく、久しく惡政の下に圧せられて、唯、旧慣を固守し、其日暮らしの境界を送るに過ぎぬ、偶々路上に踞して長管を吹き居るものを見るに、何等の理想を浮ぶにもあらず何等の趣向を有するにもあらず、唯だ赤子の如く無意味無目的にて、ボンヤリ光陰を徒消するのであるとのことぢや、万物の靈長たる人間としては実に憐れむべきものと思ふ、斯る人間の靈智靈能あることを知らしめ、人格の如何、天職の如何を知らしむるの務は余は我日本人の任であると信じて居ます。

第七、朝鮮人の道德

朝鮮人は概して道德の觀念に乏しいといふことを聞いて居る、人に対して虚言を吐くなどは当り前の様に思ふて居るとのことぢや、是れはツマリ今日まで教育も宗教も欠けて居る為であることは明かである、近頃は各小学校を立つる様になり教育の方の見込はついて居るけれども、宗教に至りては度外に見做され、韓廷のみならず、

我政府にも、其俛に任せ置かるゝ様に聞いて居るが、学校の外に宗教の改良を行はねば、決して韓国人に道德の涵養をなさしむることは出来ぬ、余の考にては韓国には寺院は今尚ほ残り居ることなれば、此寺院に日本の僧侶を自在に住せしむる様にし、実際の布教伝道を行はしむる様にすることが上策である、其様にするには我政府より韓廷に談判して、其特許を得る様にせねばならず、到底日本の宗教家が一箇人にて掛廻はりたる位にて出来るものではない、此事に就いては別に立論したいと思ふ。

二、第二回朝鮮巡講（一九一八年（大正七年））の記事
 〈一覽表〉

番号	刊行月日	媒体名	見出し
一	五月十五日	京城日報	井上博士来期
二	十五日	京城日報	井上博士講演
三	二〇日	京城日報	愛婦会講話
四	二五日	京城日報	井上博士講演日程
五	二六日	京城日報	井上博士通過
六	二六日	京城日報	妖怪博士 哲学堂建立の為 揮毫の需めに応ぜん
七	二七日	京城日報	道念の類廢を奈何
八	二七日	京城日報	井上博士入京
九	二七日	京城日報	妖怪博士妖怪を語らず
一〇	二七日	京城日報	井上博士歓迎会
一一	二七日	京城日報	万場水を打ちたる如し

一二	二八日	京城日報	井上円了博士を迎えて(槐翁)
一三	二九日	毎日申報	井上博士の講演、勤儉貯蓄
一四	二九日	京城日報	井上博士講演
一五	二九日	京城日報	井上博士歓迎会
一六	二九日	京城日報	井上博士と揮毫
一七	三一日	京城日報	井上博士日程
一八	三一日	京城日報	井上博士講演会
一九	三一日	京城日報	心理的妖怪(一) 五月二十六日講演の梗概
二〇	六月 一日	京城日報	心理的妖怪(二) 五月二十六日講演の梗概
二一	一日	朝鮮及満州	一七卷一三二号 井上博士を伴ふて長谷川総督を訪ふ
二二	一日	朝鮮及満州	一七卷一三二号 国民道徳の大綱
二三	一日	毎日申報	義州・井上文学博士来義予定
二四	一日	毎日申報	心理的妖怪(一) 五月二十六日講演概要
二五	二日	毎日申報	心理的妖怪(二) 五月二十六日講演概要
二六	八日	毎日申報	海州・井上博士講演
二七	一〇日	京城日報	井上博士仁川講演
二八	一〇日	京城日報	井上博士の揮毫
二九	一〇日	京城日報	開城より 井上円了博士
三〇	一〇日	京城日報	人事消息・井上円了博士
三一	一日	毎日申報	開城・井上博士講演
三二	二日	毎日申報	開城より 井上円了博士
三三	二日	毎日申報	馬山・井上博士来鎮期

五四	二七日	毎日申報	鮮人同化〔參〕教育万能主義
五四	二四日	毎日申報	鮮人同化〔二〕教育万能主義
五三	二二日	毎日申報	鮮人同化〔一〕教育万能主義
五二	八月一日	朝鮮教育研究会雑誌	三五号 東西両洋の分明について
五一	二三日	京城日報	妖怪博士の朝鮮迷信談
五〇	二〇日	毎日申報	人事消息・釈王寺から入京。同夜内地に
四九	一五日	朝鮮教育研究会雑誌	三四号 井上文学博士の講演日程
四八	一五日	朝鮮教育研究会雑誌	三四号 国体の精華の説明
四七	一三日	京城日報	井上博士動静
四六	一日	京城日報	井上博士消息
四五	九日	中外日報	釜山に於る井上円了氏
四四	五日	毎日申報	威興・井上博士来咸乎
四三	五日	京城日報	井上博士去来
四二	二日	京城日報	井上博士著発
四一	七月一日	京城日報	井上博士動静
四〇	二〇日	毎日申報	論山・井上博士講演
三九	二〇日	京城日報	大邱・井上博士講演会
三八	一九日	朝鮮教育研究会雑誌	三二号 心理的妖怪
三七	一五日	毎日申報	全州・井上博士来訪
三六	一四日	毎日申報	仁川・井上博士講演
三五	一三日	京城日報	井上博士講演
三四	一三日	京城日報	井上博士日程変更

〈媒体〉

・『京城日報』…大韓帝国末期から日本統治時代の朝鮮において発行されていた新聞（日本語）。一九一〇年（明治四三）の日韓併合条約締結後は、朝鮮総督府の機関紙となった。

・『毎日申報』…日本統治時代の朝鮮において発行された朝鮮総督府の機関紙（韓国語）。京城日報の姉妹紙。収録に際しては筆者が訳出した。

・『朝鮮及満州』…戦前の在韓日本人による代表的な時事言論雑誌。一九〇五年（明治三八）年創刊の『朝鮮之実業』に始まり、『満鮮之実業』、『朝鮮』を経て一九一二年（大正元）に『朝鮮及満州』となる。以後、一九四一年（昭和一六）まで継続。

・『朝鮮教育研究会雑誌』…京城の朝鮮教育研究会発行の教育系雑誌。一九一五年（大正四）から一九二〇年（大正九）にかけて六三号まで刊行された。

・『教育時論』…一八八五年（明治一八）から一九三四（昭和九）まで一七六二号刊行された教育系雑誌。

〈記事〉

〔一〕五月二五日『京城日報』「井上博士来期」

文学博士井上田了氏は曩に東洋大学、京北中学及び京北幼稚園等を開設し育英事業に従事しつゝ、ありしが明治参十九年之等の諸学校を後継者に譲り専ら国民道德の普及を計る目的にて国民道德普及会を設立し日本全国を巡遊

し講演を為しつゝありしが既に内地の大部分及び台湾の巡遊を了へたるを以て今回総督府囑託として朝鮮に渡り二十六日京城に到着四日間滞在各所にて講演の後、平安南北道、黄海道を巡回し、夫れより元山感興に至り引返してさらに南鮮地方を巡講七月十一日頃内地へ帰還の予定也

▲日程 井上円了博士の京城に於ける日程左の如し

▲二十六日 午前九時二十五分南大門駅着、午後一時より京城婦人会にて講演、参時より朝鮮教育研究会、雑誌『朝鮮及滿州』社、京城日報社主催にて京城高等女学校に於て一般講演

▲二十七日 午前九時より京城高等女学校にて同校生徒及び京城技芸学校生徒の爲め講演、午後一時半より京城普通学校にて講演、同四時半より龜山鉄道俱樂部にて講演

▲二十八日 午前九時より京城中学校にて講演、午後二時より南山本願寺に於て講演、同四時より逡信局にて講演

▲二十九日 市内視察

〔二〕五月二十五日『京城日報』「井上博士講演」

既報の如く国民道德普及会長井上円了博士の入京を機とし本社は朝鮮教育研究会及び雑誌『朝鮮及滿州』社と連合主催にて二十六日午後二時より京城高等女学校に於て講演会を催ほし教育及び妖怪■の講演を請う事とせるが当日は一般人士の来聴を希望す。

〔三〕五月二〇日『京城日報』「愛婦会講話会」

愛国婦人会朝鮮本部にては不日文学博士井上円了氏の来京を機とし来る二十六日午後一時より南山本願寺本堂に於て同博士に乞ひ会員の為め精神講話会を開催す可しと。

〔四〕五月二五日『京城日報』「井上博士講演日程」

総督府の囑託を受け朝鮮内各地に於て講演の為め二十六日朝〔昨夕刊夜とせしは誤植〕入京す可き文学博士井上円了氏は同日午後三時より高等女学校に於て朝鮮教育研究会、『朝鮮及満州』及本社連合主催に係る講演会に於て『国民道德の大綱』及『心理的妖怪』の二題下にて講演を為すべく一般の来聴を歓迎す。尚右の外、京城に於ける講演日程左の如し。

▲二十六日〔日曜〕午後一時より二時半、愛国婦人会主催にて南山本願寺

▲二十七日 午前九時より京城高等女学校▲一時より三時京城高等普通学校▲四時半より竜山鉄道倶楽部

▲二十八日午前九時より京城中学校▲午後二時より三時半南山本願寺〔主催〕▲四時半より逋信局

〔五〕五月二六日『京城日報』「井上博士通過」

文学博士井上円了氏は対馬丸にて二十五日夕着釜、同午後十一時半発列車にて京城に向ひたり〔釜山特電〕

〔六〕五月二六日『京城日報』「妖怪博士 哲学堂建立の為 揮毫の需めに応ぜん」

〔※筆跡の写真あり〕

朝鮮総督府囑託として朝鮮十三道を巡講すべく二十六日朝入京す可き文学博士井上円了氏は、帝大文科第一期頃の出身にて哲学館即ち今の東洋大学の創立経営者として▲哲学思想の幼稚なりし日本に哲学思想の普及を尽瘁せしことは人々の知る所なるが、氏は心理学上より通俗的に妖怪を説明して迷信打破に尽瘁し、妖怪博士としても名高き人なるが、近時国民道德の頹廢甚しきを憤慨し、国民道德普及会なるものを起し、日本全国を巡講し国粹の保持と▲国民道德の涵養鼓吹に努むること十余年、四十余県四百余郡二千六百四十余箇所、聴講者五百万人と云ふ数に及ぶと云ふ、氏は欧米各国に遊ぶこと三回、其他印度及び支那の各地を巡遊し、足跡殆ど全世界に及び六十歳の今日尚ほ南船北馬寧日無しと云ふ奮闘ぶりなり、氏は学者に珍しく書道に堪能なるを以て国民道德普及及び氏が多年経営中の哲学堂建立費に充てん為め巡講の余暇を以て▲揮毫の需めに応ずることゝなし居れり、潤筆料は半折二円、全紙三円以上の程度にて謝礼することゝなり居れり、京城にての希望者は博士止宿の京城ホテルに直接申込まれても善く、又本社なり朝鮮及び満洲社の方へ申込まれても宜し、博士の述懐に「書を書きて恥を書くのも今しばし哲学堂の出来上るまで」と云ふ狂歌あり、

〔七〕五月二十七日『京城日報』「道念の頹廢を奈何」

西洋文明の鵜呑みは大禁物 文学博士 井上円了氏談

二十六日朝入京したる井上円了博士を水原駅迄出迎へる、博士は車中に於て語つて曰く、朝鮮は這度こんどで恰度ちやうど二回目である、第一回は日露戦争の翌年即ち明治三十九年で釜山から直ぐ京城に入り仁川、平壤等を視察した上、満洲に向つたのである、用向は左様・・・戦後の滿韓視察とでも云はうか、外に深い意味はなかつたが何しろ夫れから十三年も経過して居るのだ、其当時に比べると総てが茫として

▲実に夢の如しぢや 早い話が車窓に映ずる山々も十三年前に較べると非常に青々として何んとなく山の形ち迄が變つて来たやうである、總督政治の恩沢、山に及ぶとでも云ふものか、何？ 国民道德普及会の趣旨、有るよ、
〳、大いに有るよ、一体日本の学者は一も西洋、二も西洋と、無闇に西洋にカブれて了しまひ西洋の書物を鵜呑みにして夫れを其假日本の民度に施さうとする傾がある。之を例へて見れば恰度西洋人の着物を其假日本人に着せるやうなもので頗る感服出来兼ねる話し、然し夫れも好し、だが道德とか教育とか乃至は宗教とかと云ふ形而上のものに至つては何うしても日本人は日本人の

▲身体に適した着物を著せなくてはならぬ、語を換へて云へば、之等は総て日本固有の精神を基礎として、其精華の存する処を伝へなくてはならぬと思ふのである、西洋文明の輸入と共に日本の文物は凡百方面に絶大なる影響を来したが、精神上の問題では、道德に対する觀念亦非常なる變調を呈して来たのである、言ふ迄もなく道德は人間生活上の源泉となるもの、此道德迄が段々西洋カブレになり我国伝来の美しい精神が次第に消滅すると云ふ事は頗る憂ふべき現象と云はねばならぬ、其も学校にでも居る中はまだ好いとして一旦学校を出たが最後、西洋カブレがせぬ迄も、道德などと云ふものは

▲殆ど捨て、顧みられぬ、試みに今日農村を訪ひく把る人に『道德とは什麼どんものか』と訊ねて見よ、之に答へ得るものが果して何人あるかぢや、道德の頽廢之より甚だしきはなく実に慨嘆に堪へぬ次第である、国民道德普及会は詰り此風潮を察し国民道德の頽廢を防ぐと共に、其普及向上を図る為めに生れたのである、私は之を思ひ立つと同時に其普及向上を図るには親しく各地を行脚して講演するが一番の捷徑と信じ、明治三十九年以降、日本国内津々浦々を巡回講演を試み既に二千五百町村に足跡を印した、最初は

▲十三年計画であつたが一県下に少くも二三箇月を費やすので一年懸つて漸く一県位しか巡れず、日本全国に足

跡を印するには尚五六年を要する見込みである、車馬の通ぜぬ僻地には草鞋懸けでテク／＼出懸けると云つた調子で随分困難する事もあるが、各地の変つた人情風俗に接して思ひ懸けなき好い講演資料を得る事が出来るのは甚だ愉快である、『人見て法説け』と云ふ諺があるが、道徳普及の如きが即ち夫で、一口に日本と云つても東と西とでは人情習俗に多大の相違があるから、私は地方巡回を機とし其間には努めて之等の人情習俗を研究する事にして居る、朝鮮は

▲各道を巡回する予定であるが、汽車のない土地でも自動車を通つて居ると云ふから然う骨も折れまいと思つて居る

〔八〕五月二十七日『京城日報』「井上博士入京」

総督府囑託文学博士井上円了氏は既記の如く国民道徳普及講演の爲め二十六日午前九時南大門駅著列車にて入京、京城ホテルに入れり、

〔九〕五月二十七日『京城日報』「妖怪博士妖怪を語らず」

学生の修養公園を設置し其中に哲学堂を建立

△井上円了博士と語る△

妖怪博士と云へば三ッ児でも知つて居る井上円了博士を水原駅に迎へる、早朝且つはお疲れのところを甚だお気の毒とは思つが遠慮と云ふものを母の胎内に忘れて来た記者、釜山発の急行列車が八時何分水原駅に停車すると直ぐ一等車に襲撃する。

▽鼠色背広姿の博士は折柄足を組合せ眼鏡をかけて雑誌を耽読して居たが記者の姿を見ると嫣然しながら迎へ『よあお懸けなさい』と穏なものごし、白い頭髮、同じく白く房々と垂れた顎鬚、柔和な顔立……博士と云ふよりも寧ろ品の好いお爺さんサンタクロースの様に

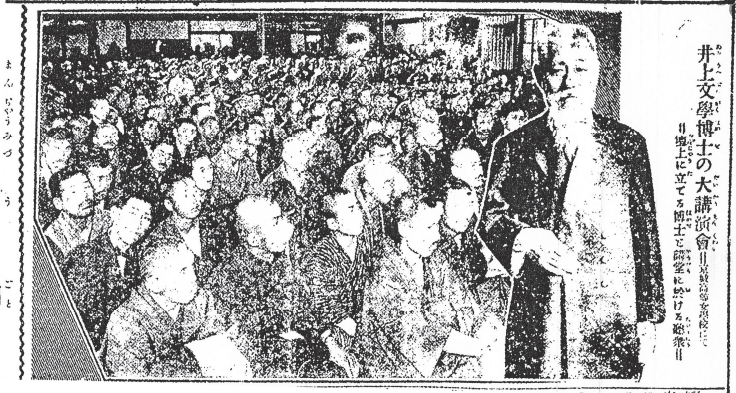
▽懐味のある お爺さんと云つた方が適はしいやうな気がする、『相変らず妖怪はご研究ですか』と訊くと『いやもう近來は頓と宗旨替へで……。』と顎鬚を扱きながら、博士は數年來苦心經營中の哲学堂について語る『之は学生徒の修養に資する為め

▽一万五千坪 ばかりの敷地全部を公園とし其公園の中に建てたのです。哲学堂には有名な哲学者の靈が祀つてありますが、此外園内には図書館、博物館のやうなものもあります、場所は東京府下豊多摩郡で市内から二里あるが其半里手前迄は電車が通ひます、然しまだ全部完成したと云ふ訳ではなく

▽漸く七分通り出来上つた丈で残余の三分は是からです、敷地は數年前、元の哲学館即ち東洋大学を郊外に移転すると云ふ議が持ち上つた節、買入れたのであるが、其後移転が沙汰止みとなつたので之を利用した迄です』斯う語つて博士は更に話頭を転じ『朝鮮人は却々日本語が巧い相ですね、同化々と云ひますが

▽同化の捷徑は先づ國語を普及するにある……兎に角結構な事だ』と如何にも喜ばし相である、博士は滔々として談論すると云ふ方ではなく、責任ある問題は成可く回避する方針らしく『時代の趨勢に伴ふ新道徳を樹立する必要があると思ひますが之についての御所見は』、『さあ……』、『近來大分

▽國民思想に変■を來したと思ひますが』、『さあ……』と云つた調子、其処に学者としての周到な用意も窺はれるが、之では記者も手持ち無沙汰、最後に『今度は揮毫もなされる相ですね』と訊くと『ハッハ……揮毫ですか誠にとお恥しいものだが、要するに路用の足しと、前に云つた公園の維持費に充てるのです』と又しても例の顎鬚を



井上文学博士の大講演會
井上博士は壇上に立てる博士と講堂に於ける聴衆

『京城日報』一九一八年〔大正七〕五月二十七日

扱とく、記者は南大門で失敬した。

〔二〇〕五月二十七日『京城日報』「井上博士歓迎会」

井上円了博士歓迎会を二十七日午後六時京城ホテルに開催す、参加希望者は予め同ホテル事務所に申込み置き会費金三円五十錢携帯す可しと

〔二一〕五月二十七日『京城日報』「満場水を打ちたる如し」

〔※写真〕壇上に立てる博士と講堂に於ける聴衆

朝鮮教育研究会、『朝鮮及満州』社及本社の主催に係る文学博士井上円了氏の講演会は二十六日午後三時半から京城高等女学校講堂に於て催された。

▼定刻前から満場立錐の余地もなく、尚聴講者陸続として絶たなかつた為め、会場の混雑を慮つて定刻より約三十分遅れて開会、井上博士随行の来島好間氏先ず国民道德普及会の趣旨を述べ、次に主催者側を代表しての积尾旭邦氏の挨拶あり、四時急■の如き拍手に迎へられて井上博士は演壇上の人となつた。最初の演題は『国民道德の大綱』と言ので其の要旨は天地冥々の

間に一種不思議たる玄妙の氣、即ち正氣なるものがある、

▼我が国に於ては此の浩然たる精氣が国民の上に顕現して忠道となつた。之れ東洋にあつては唯一の東洋文明の相續者たり全世界に向つては新興國たり、其皇統一系の國体は世界に冠絶しつゝある所以である・・・と■声一番し、教育勅語は実に国民道德の淵源であり、戊申詔書は國体充實の上に於て國民齊しく拳々服膺せざる可らざるものなりと英國、亜爾然丁及び支那等に於ける愛國心の欠陥に例を取り

▼我國の美点を挙げ、大いに国民道德の鼓吹に努めたるが、聴衆肅として水を打つた様であつた、十分間休憩の後再び壇上の人となりたる博士は、自分は妖怪研究を専らにしたため妖怪博士とかお化の先生とか言はれ何処へ行つても妖怪の話させねばならぬと諧謔一番、満場を賑はせた後、幽霊もいろく種類があつて西洋人の

▼見る幽霊は不透明だが日本人のは透明、同じ日本人でも内地人のは足がないが生蕃のは首がない、之などは確かに人間の潜在意識の一部が幻灯のやうに内部から光線の作用で反射するのであつて一種の夢と見ねばならぬ、大抵の幽霊は着物を着て居るが魂が衣類を着る必要はなからう、只茲こゝに一つ變つた幽霊がある、と言うには維新前、上総の人が

▼伊勢詣での帰途、三島の宿で病死した、その日同時刻に上総に居る同人の父母が其の倅の帰宅した姿を見て怪しんだと言ふことである、是れは精神電氣の作用とでも言ふ可きか、兎に角未だ定つた解釈を下す事は出来ないが世間には恠あやうした实例は尠すくなくない・・・と諧謔を交へて聴衆をして■を解かしめ五時半講演を終つた。尚当日は聴講者にして博士の哲学堂建立の趣旨に賛成し揮毫を求めたる者、実に一千二百名に達するの盛況を呈した

▲愛国婦人会

井上博士は右講演に先だち午後一時より南山本願寺に於ける愛国婦人会主催の講演会に於て『精神修養』と題する講演を為したるが會員其他の参聴者婦人男子五百名に達し非常なる感動を与へたり

●井上博士揮毫

既報の如く井上博士は哲学堂建立費に充てん為め巡講の余暇を以て一般揮毫の需めに応じつゝあるが、潤筆謝料は四つ切五十銭以上三円迄にして京城に於ては京城ホテル在宿中の博士随員に於て申込を受く可しと

〔二二〕五月二八日『京城日報』「井上円了博士を迎えて（槐翁）」

○我が敬愛する井上円了博士来るを歡ぶ。博士は、近時国民道德の頹廢を慨し、国民道德普及会を起して、日本四十余県を巡講し、国粹の保存と、国民道德の涵養鼓吹に努むること十余年、其の間、欧米各国に遊ぶこと三回、其他印度、支那各地を巡遊し、足跡殆んど全世界に及ぶとのことである。

○博士はまた、東京府下豊多摩郡に、一万五千坪の地を選んで、哲学堂を建て、有名なる哲学者の靈を祀り、学生等の修養に資せんとしつゝある。而して之れが完成を期する為めには講演の余暇を利用して、江湖の揮毫に応じ、只管哲学堂の完成に努め、今回はまた総督府の囑託に依じて、將に十参道巡講の途に上らんとして居るが、吾人は六十一の老軀を提げて、我が思想界の為に、尽さんとする博士の熱烈と勇猛とに向つて、先づ多大の敬意を表せねばならぬ。

○今や、我が国民道德の頹廢は、其の極に達せんとして居る。今に於て、之が救済の方法を講じなかつたならば、遂には国家社会の為に悲しむべき場合に■■至らぬとも限られぬ。近時横文字の一行も読めるやうになる

と、一にも西洋、二にも西洋と、西洋カブレて了ひ、西洋の思想や学問を鵜呑みにして、或は祖先伝来の魂までも、入れ換へようとすの傾あるは慨すべきの至りである。

○五箇条の御誓文にもある通り、吾人は、広く世界に智識を求めて、我帝国の発展に資せねばならぬことは、固より論なき処なるが、是は、日本固有の精神を基礎として、それに益々精彩を付け、以て世界に冠絶せる国家たらしめんとするに外ならぬのであつて、決して魂までも、取り換へるのではない。

○博士は「試みに、今日農村を訪ひ、鋏はさ把る人に、道徳とは什麼どんなものかと訊ねて見よ、之に答へ得るものが、果して幾人あるか」と、国民道徳の頹廢を慨して居るが、農村は姑く置き、世の所謂智識階級に向つて、此の質問を發して見よ。言行共に、博士の首肯すべき、確固たる答をするものは、恐らく暁天の星程もあるまいと思はれる。

○博士よ、願くば、此の機会に於て、混沌たる思想界に、一道の光明を与へられよ。而して我が国民をして天壤無窮の国体と共に、朝日の匂う山桜の如く、花も実もある大和魂の所有者たらしめられよ。

〔註〕槐翁は中村健太郎のことである。中村は熊本県が朝鮮に派遣した朝鮮語留學生であり、『漢城新報』の朝鮮語版を担当し、統監府の翻訳官になり朝鮮語新聞の検閲を担当するほど朝鮮語によく通じていた人物である。咸苔英「一九一〇年代朝鮮総督府機関紙と徳富蘇峰」〔国際基督教大学『アジア文化研究』

〔三七〕、二〇一一年〕

〔二三〕五月二十九日『毎日申報』「井上博士の講演 勤儉貯蓄 京城高等普通学校にて」

総督府の囑託を受け、朝鮮内各地において講演のため二十六日朝に入京した文学博士井上円了氏は、同日午後三

時から高等女学校で講演を行い、二十六日午後一時からは南山本願寺で、二十七日午後、午前九時から京城高等女学校で講演を行い、同日午後一時からは、京城高等普通学校で同校生徒一同を集め、勤儉という問題をもって約三十分の間、講演したという。

〔二四〕五月二十九日『京城日報』「井上博士講演」

井上博士博士は二十八日午前九時より京城中学校、午後三時より東本願寺、四時半より逓信局に於て、孰れも講演をなせり。尚二十九日龍山偕行社に於て講演すべし。

〔二五〕五月二十九日『京城日報』「井上博士歓迎会」

井上博士歓迎会は二十七日夜、朝鮮ホテルに於て催されたるが参会二十余人歓談を尽したりと

〔二六〕五月二十九日『京城日報』「井上博士と揮毫」

滞京中の井上博士は二十九日夜出発の筈なるが、博士に揮毫を依頼せる向きは二十九日中に京城ホテルより受取らるべしと

〔二七〕五月三二日『京城日報』「井上博士日程」

井上円了博士は全鮮各地巡回講演の爲め二十九日午後九時南大門発新義州に向ひたるが、其後の日程左の如し

▲参十日 午前十時二十五分新義州着、午後同地にて講演、安東県を視察す

- ▲参十一日 午前八時五十分新義州発、同九時五十分義州着講演
 - ▲六月一日 午後八時二十五分新義州発、午後一時二十七分平壤着講演
 - ▲二日 平壤滞在講演
 - ▲参日 午前中江西往復、参度平壤にて鉄道主催の講演会に臨む
 - ▲四日 午前六時五十分平壤発、同八時参十分新義州？着、講演、午後参時十二分平壤帰着
 - ▲五日 午前六時平壤発、沙里院に赴き、午前中同地にて講演、午後自動車にて海州に赴き、
 - ▲六日 海州滞在講演
 - ▲七日 海州発午後五時四十分開城着
 - ▲八日 開城滞在講演、午後五時四十四分開城発、午後七時二十五分京城着
- 九日より更らに仁川、春川にて講演を為し終りて南鮮方面に向ひ七月四日京城に帰着し、更らに元山より北鮮方面に向ひ清津、鏡城に到り同十八日参度、京城に帰着、翌十九日出発、二十一日頃東京着の予定なり。

〔二八〕五月三二日『京城日報』「井上博士講演会」

六月二日午後二時より 平壤大和町華頂寺にて

井上巴了博士講演会

主催 京城日報平壤支局

〔二九〕五月二日『京城日報』「心理的妖怪」(一)五月二十六日講演の梗概

私は嘗て妖怪に就いて研究をしたところから、妖怪博士又はおぼけの先生などいふ綽名をもらつて常に妖怪談を所望されるのですが、今日も其の例にもれず茲に其のお話をする次第であります。

妖怪には物理的のものと心理的のものとありますが、今日は物理的妖怪談は之を略して単に心理的妖怪談に止めるつもりであります。

心理的妖怪は心理作用によつて起るものであつて、彼の幽霊の如き狐つきの如き將た天狗にさらはれた話の如き即ち是であります。私はこれまで色々の幽霊を集めてみましたが、普通に幽霊は墓場にはあらはれるとか柳の下に出るとかいふのは全く迷信に過ぎないのであります。若し實際此のやうな幽霊があるとすれば、靈魂其のものに形体があるといふことに帰着するから、到底信するを得ないのであります。畢竟是等の幽霊は心の反射に過ぎないのであつて、例へば夢のやうなものです。起きて居るときの夢、これを幽霊といつて騒ぐのです。幽霊が心理作用である証拠には処によつて其の姿がちがつて居るのによつても分ります。即ち日本の幽霊は不透明ですが、西洋の幽霊は極めて透明です。又内地の幽霊には足がなくて、台湾生蕃人間の幽霊には足はあるが首がありません。首がないのは彼等生蕃人が首を切るのを一種の名譽として居るに拘らず、矢張り内心に於て之を快しとして居ないからであります。即ち首を斬つたときの印象が首のない幽霊になつてあらはれるのです。又催眠術で自由に幽霊を見せることが出来るのも、幽霊が心理作用の結果であることを証拠立つるのであります。

併し世間の妖怪談中には単に迷信とのみ断するを得ないものもあります。嘗て東海道参島の或る住持の話に、それは住持がまだ子供の時で維新の頃のことでありましたが、上総の人たちが伊勢参宮の帰りに参島の或る宿屋に泊つたさうです。ところが其の中の一人が霍乱に罹つて其の翌夕とう※亡くなりました。上総の国許では其の

家族は丁度晩食をして居たのですが、其の所に彼の人が今帰つたといつて不意に姿をあらはしたので皆非常に驚きました。其の頃は無論今日のやうに旅行案内といふものはありませんから、前に参宮をした人の手帳によつて大体旅程の見当をつけたのですが、それによるとどうしても帰りが早過ぎる、それで皆が不思議に思つたのです。すると其の姿が忽ち消えてしまつたといふことです。

又嘗て高知市で聞いた話ですが、参十五六年前に市から十里ほど離れた或る郡役所に就職した人がありました。此の人は親を市に残して妻と二人で赴任したのです。一日同僚が遊びに来たので酒を飲みながら四方八方の話をして居ると、四つになる子供、これは赴任後に出来た子で無論高知市に居るお祖父さんの顔はまだ一度も見ることがないのですが、其の子供があわてゝ駈け込んで来て、今「昼十二時頃」お祖父さんが亡くなつたといつたさうです。両親は何を馬鹿な事と叱りつけて別に気にも留めないで居ると、十分間ばかりしてからまた前のやうにいひに来たさうです。すると其の晩果して高知市から或る親戚が知らせに来ました。而も其の時刻までよく合つて居たといふことです。

是等の話は普通の幽霊談とちがつて単に迷信とのみいふべきものではありません。或る点までは確かに事実です。さて事実とすれば如何に之を説明すべきかといふことが、次に起るところの問題であります。唯物主義の心理学では解決がつきません。此の事に就いて私は物質界に於て今日無線電信といふものがあつて其の装置によつて遠くのことを知ることができるのと同様に、精神界に於ても此の物質電気に対して精神電気即ち動物電気といふやうなものがあると信ずるのであります。然らば此の精神電気は如何にして伝はるのであるか、此の説明も私にいはせれば極めて簡単です。即ち物質電気の場合に相当の装置を要すると同じく、精神電気の場合にもやはり或る種の条件を必要とするのであつて、其の条件は即ち血縁関係であります。血縁関係ある者は此の精神電気

を感受するに都合よき状態にあるのであります。

〔二〇〕六月一日『京城日報』「心理的妖怪」〔二〕五月二十六日講演の梗概

然るにすべての血縁者に同時に伝はらないのは何故であるか。これも物質電気の場合に其の電気を聴き取る者を必要とすると同じことで、精神電気の場合に於ても単に血縁者といふだけではまだ不十分で、やはり之を感じ得べき状態にあらねばなりません。前にいつた四歳の子供は虚心平気であつたから之を感ずることができたのであります。三島から幽霊が態々上総までやつて来たといふのも、実は精神電気に感応してそれが反射して姿をあらはしたに過ぎないのです。福来博士は之と反対に先方の人の心が姿をあらはすのだといはれるけれども、それならば今死にましたとか何とかいふべきであつて、単に姿をあらはしたゞけでは不十分です。私はやはり精神電気に感じ其の反射によつて生ずるところの幻象に過ぎないと信ずるのであります。

佐渡では狐の代りに一般に貉むじなを恐れ之を団三郎といつて山の上に祭つてありますが、嘗て相川の人が一日山に登ると団参郎の岩穴の前にうまさうな餅が供へてあるのでそれを食つてしまつた上に罰を当てるなら当てて見ろといふ勢で、其のあたりに小便をしたといふ話があります。又同じ相川の人で東京から帰りに新潟から佐渡に渡つて、それから山越をして帰つて来ると、途中で例の貉が月に向つて腹鼓をうちながら、面白さうに遊んで居たさうです。そこで此の人は一ついたづらをしてやらうといふ気を起して、大きな石を投げつけました。すると貉はびつくりして逃げ出しました。さて此の人は漸く家に帰つて来たが、留守居の者は旦那様が二人おいでになつたといつて大騒をしたのです。段々其のわけを聞いてみると、所謂旦那様といふのが先刻帰つて来て今座敷で夕食をして居るといふことです。これは怪しからんと踏み込んで見ると、成程自分と全く同じ人が而も自分の妻と差

向ひで一杯傾けて居るから、怒るまいことか己れといひさま一刀両断にせんとしたが、其の時彼れは落ちつきはらつていふには、自分は團三郎だお前が先刻自分にいたづらをしたから其の仇を返しに來たのだ、もうこれで帰るといつて姿搔き消すやうになつたといふことです。

果して之が事実かどうかは疑問ですが若し事実とすればどう説明を下すか、これが問題であります。これもやはり前に石を投げつけたときの感情がここに幻象を生んだものと思はれません。吾々が通常意識といふのは実は顕在意識のことであつて、動もすれば潜在意識の力を認めないですべての心理作用を説明しようとするから駄目なのです。此の人は石を抛げたとき面白がつて居たのでありませうけれども、内心に於てはやはり恐しいといふ感情があつたに相違ありません。そして此の恐しいといふ感情が潜在意識として、存して居つてこれが精神電気によつて家人に伝はり、ここに幻象を生じたものと思はれるのであります。要するに彼の狐つきの如き將天狗にさらはれた話の如きものも畢竟此の類のものであらうと思はれます。〔終〕

〔二二〕六月一日『朝鮮及滿州』一七卷二三二号、旭邦生「井上博士を伴ふて長谷川総督を訪ふ」

五月の末であつた、余が旧師井上円了博士が渡鮮入京されたので、案内がてら伴ふて長谷川総督を其官邸に訪ふた、南山々麓は鬱々として燃ゆるが如く官邸前に林を成せる葉桜は青々として滴る如く、官邸は此青い森の中に屹然と聳えて居る、見るから気分が爽かになる、井上博士も気持ちよげに仰ぎ見て東京にても見ない心持ちの善い官邸だと嘆賞して居られた、神田秘書官に刺を通ずると総督には北鮮巡視で少し疲れて居らるゝが折角遠來の客であるからと云ふので早速例の二階に在る総督の事務室兼書齋に通された、総督には日曜であるし、少し所勞でもあるからであらう、何時もの軍服を脱ぎ珍しくも和服姿で迎えられた、ヤーと云ふ簡短な挨拶の下に一揖

して主客椅子に倚つた、総督は多少所勞であると云ふのに却て平常より血色も善く、元氣颯爽として居るので余は先づ口を開き北鮮巡視で多少御疲勞の模様と承はつて居つたが、案外御元氣ではありませんかと言ふと、総督はア、是れでもまだ戦争があれば何時でも飛び出す積りだからなあと一寸肩を聳かし例に依り快濶な豪傑笑ひをする、更に話頭を続け北鮮地方の案外交通の便の開け居ること、北鮮民の沌撲なること、何れの地に行つても子供や青年は日本語を解すること、到处で総督一行を歓迎したことなどを語り、十里の道を馬で走り、憲兵の宿舎に泊り、久しぶりに行軍をやつたやうな気がして大に若か返つたと呵々大笑された、七十の老人とは思へぬ元氣である。

井上博士は国民道德普及を思ひ立つた動機を語り、教育 勅語は日本国民の精神の根底とすべきものなるに単に学校内に限られたる如き状態に在るを慨し之を国民一般に普及し、教育 勅語の御精神を国民全般に徹底せしめん為め、三十九年以来日本全国を巡講し、四十余県に亘りたる旨を語られ、且つ日本今日の教育が兎角輕佻浮薄に流れ健全なる思想の涵養に欠くる所あるは国家将来の為め悲むべきことなど語られた。

総督は博士の話を承け、左様です、何うも今日の教育は感心致さぬ、片々たる輕薄児や薄志弱行の青年が多いやうで困る、朝鮮でも朝鮮人教育に就ては吾輩も大に注意して居る、何うも形式に馳せ、体裁は整うても肝心の精神を忘れては居らぬかと心配して居る、第一朝鮮の生徒が何れも日本語に熟達するのは感心であるが、其精神が果して日本化して行きつゝあるのであろうか、又学校と家庭の連絡が甘く取れて居るのであろうか、学校で教へた主義方針を家庭で打ち壊はされては居らぬであらうか、斯う云ふことに就て大に貴下の視察を願ひたいと云ふやうなことを博士に話された。

〔二二〕六月一日「朝鮮及滿州」一七卷二三号「国民道德の大綱」

左の一篇は昨月二十六日午後參時より京城高等女学校講堂に於て行はれたる井上博士の講演の概要である〔記者筆記〕

自分は我が国民道德が近時著るしく頽廢の傾向を帯びしを慨し明治三十九年以来日本全国を行脚して国民道德の鼓吹に■昂めて居る。而して我が国民道德の根底は先帝陛下の訓へ給へる教育勅語である。教育勅語は我が国体を明にされ、同時に国民道德の根本を示された尊き訓である。実に教育勅語は国民道德の淵源である。又戊申詔書は国民道德実行の方法を更に一層具体的に訓へ給へる詔書である。故に教育勅語と戊申詔書との二大勅語の御趣旨を奉行することによつて国体の尊嚴を明にし国力の充實を期し得らるゝのである。苟も帝国の臣民たるものは此の千古不磨の大遺訓を遵奉して帝国の發展向上を圖らなければならぬ。

熟々歴史の跡を辿りて世界文明の状態變遷推移等を研窺する時は印度の哲学支那の文教制度等所謂形而上の文明は東洋に創まり東洋の文明は西洋の文明より遙に先きに花を開いたのである。然るに現状は果して如何であるか。西洋の文明は今將に満開の時代となつて百花繚亂を競ひ華を誇つて居るのに一方東洋の各国は殆ど滅亡の状態に陥つて居るではないか、従つて東洋の文明は頽廢瀕死の状態に陥つて居る、此間に屹立して西洋の文華と美を競ひつゝあるものは独り我が帝国あるのみである。試みに見よ、印度、アラビヤ、ペルシヤ、支那等何れもも立国の体面を保持して居るものが果して幾何あるであらうか。若し東洋の天地に日本なかりせば東洋は西洋の文明、西洋の勢力に压倒されて全滅したに違ひない。僅に骨董品として學者間に其余脈を保持するに過ぎないであらう。幸に国民の弾力に富む日本が儼然として屹立して居る為め東洋の文明が今日猶ほ儼然と保持されて居ると云つても決して過言ではないのである。

抑々我が国体の尊嚴を維持し來れる原動力は何であるかと云へば忠孝の二道である。天地間には冥々の裡に一種不可思議の玄妙の氣が潜在して居る。これは偉大な精氣である。孟子の喝破せられたる所謂浩然の氣を養ふと云ふことは即ち予の所謂玄妙の氣である。此の偉大なる精氣が我が日本帝国に於ては国体の上に忠孝の形を以つて現はれ居るのである。忠とは所謂大義名分の事である。日本の忠なるものゝ精神の中には何等不純なる利己的の分子は含まれては居らぬ、義を以つて動くのである、日本人の孝と云ふのも此忠と云ふ心の変形であつて日本人の忠と孝とは一致すべきものである。是が大和魂である。此利己主義を超越した大和魂が日本帝国の万世一系の榮譽ある皇室を無窮に奉戴し維持し來れる根源である、西洋人の思想は極端に利己的である。この利己的心情が発達し向上して仁義博愛と云ふやうにもなつて來るが、彼らの道德的行為は其根本思想を利己に発して居る、今日の欧州戦争の遠因は彼等の利己心の発動と見ることが出来る。英国人は旺に独逸の蠻行を批難攻撃して止まないが、独逸人は又英国の横暴非行を拏げて、元來英国が今日の強大なる領土と勢力とを有するに至つたのは有らゆる横暴非道を働いて他国を侵略し他民族を征伏したのでは無いか、彼らは何の辭を以て今は吾々の取る行動を彼れ此れ云ふ資格があるかと云ふて盛に非人道極まる暴行を働いて居る、我輩は独逸の言分が正しいか英国の對独批判が正しいかは此処には言はないが、要するに西洋には一般に利己主義の思想が旺盛であると云ふことだけは断言して置く、西洋人の国家に対する根本觀念は吾人日本国民が国家に対する觀念とは全然異なつて居る、忠君愛国の精神思想は其出发点を異にして居るのである。

同じ東洋でも支那人の思想と日本人の思想とは月鼈の差がある。支那人が我利我欲の念の熾烈なることは今更云ふまでもない、その極端な程度は西洋人よりも一層甚しいのである。我輩が先年支那漫遊の途中偶々上海に行つて目的した事実であるが、江水の岸に立札をしてあつて、若し水中に溺れんとするものを救助したものには

八十銭の賞与を授ける、又將に溺死せんとする危殆の程度状態に陥つたものを救助したものには一円を授けるとある。極端なる利己心に囚はれたる支那人は水に溺れんとするものを見て容易に救助しやうとはしないで傍観して居る、そして將に溺死しやうとする時になつて始めて救助に出懸けるのである。或る人が彼等の行動の此の心理状態を穿つて八十銭より一円欲しい為めに他人の苦痛を座視して居る支那の国民性は寒心す可きではないかと嘆じて居つたが恚る事は日本人の到底真似の出来ない所である。

若し日本人であつたならば恚る際には自己の利害を顧慮するに違なく身命を賭してまでも救助しなければ居られない、此の刹那の間に起る尊き義憤の念には犠牲同情の精気が充満して居つて利己的の私心は微塵もないのである。火事の場合でもそうである。日本人なれば一郷一村のものが寄り集まり罹災者の家に駆けつけ猛火を冒して防火に努め其の家の家財道具を運び出す等凡て義侠的の行動を執らなければ自己の良心も承知せず、又社会からも批難されるが、支那では恚る際に之を見物し傍観して少しも助力しやうとはしない、又馬賊が隣家に襲撃して来た場合の如きも隣家の危急を救はうとして尽す心のないのは、勿論雨戸を堅く鎖して只管自家に累の及ばざらん事を願つて居る、人情の相違が同じ東洋の接壤地でありながら恚くも區別のあるのは民族性の如何に異なるかを知るに足る。

日本人の心に横溢して居る義心は日本の精華である。これが蒐まつて大義となり名分となり忠孝となるのである。是が日本民族の特色である。此の特色は何処までも保持し培養しなければならぬ、一国には一国の特色がなければならぬ。徒らに他国の真似をして本来の特色本領を傷けたり滅却したりすることは啻に不可であるばかりでなく極めて危険であることを識らなければならぬ、帝国には幸に世界に卓越して居る大義即忠孝の道が厳存して居る、これが吾れ吾れ日本人の誇であり力である。西洋人は愛国心の涵養の為に如何に苦心して居るか知れ

ない、英国其他の列強が日露戦後に於て我が国家の團結力の旺盛なること國民の忠君愛國の念の深きことに驚嘆して此の美風は果して何によつて養成されたのであるかにつき研究心を起すに到つた。そして教育勅語の翻訳をなし教育勅語の大精神を研究しやうと努めたが彼等には恐らく其眞精神が感孚し徹底し得であらう。

南米の各共和国では愛國心の涵養方法につきて非常に腐心考慮を費して居る、自分が先年南米に遊んだ際、亜爾然丁共和国の大統領が愛國心の養成策として小学兒童に放課後毎日国旗掲揚の場所を通過せしめて敬意を表せしめて居るが、これは至極名案であると云ふことで各国共皆之に倣つたと云つて大得意で居ると云ふことを聞いたが、吾輩の考を忌憚なく吐露せしむるならば未だ思想幼稚な小学兒童に恁る抽象的な方法を用ひて克く愛國心を養成し得らるゝや否や頗る疑問であらうと思ふ、愛國心を養成するには彼等國民の尊崇すべき國体其他具體的の表徴がなければならぬのである。日本が万国に比類なき万世一系の皇室を戴いて居ると云ふことが日本國民の忠君愛國の念を熾烈旺盛ならしむる根本的原因である、それ故日本の将来も永遠に此の忠義と云ふことを國体の中心として行かなければならない。我輩は再び繰返して云ふ、教育勅語は我が國体の尊嚴を訓へ國民の向ふ所を指示されたるもの、而して戊申詔書は教育勅語の精神を充実すべき方法を訓へ給ひし尊き御教訓であるから我が國民は此の二大教訓を信条として進まなければならぬ、今や日本と朝鮮とは併合されて一國となつたが元來國名より日韓は一つである。

名は体を表はすと云ふことは一面の眞理である。日本は読んで字の如き日の本の國即ち太陽の國と云ふ意である、又朝鮮は朝日の鮮かな國と云ふ意味である。これは支那人が支那から見て名づけたものであらうが、よく穿ち得た名称である。東の日本方面から差し昇る朝暾が輝々として鷄林の山河に映写して朝の朝鮮の景色を鮮かならしむると云ふ地理的宿縁を描写したものである。故に朝鮮は古來日本と特殊の親密關係を維持して來たのであ

るが、今や此の両国は合邦し一団と化して光榮ある万世一系の天皇陛下を奉戴し御稜威の下に東洋の文明を發達せしめ、東亜民族の興隆を企図し世界の文明に貢獻せねばならぬ。

〔二三〕六月一日『毎日申報』「義州 井上文学博士來義予定」

井上文学博士は、来る三十一日來義し、今日午前十時から南門公会堂で国民道德に関する講演を行った後、今日午後五時、新義州へ歸還する予定である。聴講者は、諸学校卒業者、中学校生徒一般、公衆男女共〔国語で講演を聴取できる者〕講演後、請求により揮毫も行なうという。その一半は哲学堂設費及び維持費とし、一半は講演費、又は教育慈善公共事業に寄附するという。半折二円、全紙三円の予定であるが、希望者は、会堂で申し込み、紙は会堂において岸井商店が販売の予定であるという

〔二四〕六月一日『毎日申報』「心理的妖怪 〔一〕 五月二十六日講演概要」

※〔一九〕の韓国語訳

〔二五〕六月二日『毎日申報』「心理的妖怪 〔二〕 五月二十六日講演概要」

※〔二〇〕の韓国語訳

〔二六〕六月八日『毎日申報』「海州…井上博士の講演」

文学博士井上円了氏は、随員一名を帯同して去る五日、沙海線自動車で來海し、同郡芙蓉堂で上午には朝鮮人、

下午に内地人及び官吏を会同し、国民道德に関する講演を開いたという。

〔二七〕六月二〇日『京城日報』「井上博士仁川講演」

井上円了博士は予定の如く八日午後六時二十分下仁、同夜八時半より東本願寺に於ける赤愛同社委員部主催の講演会に臨み、九日午前八時十分、公立小学校講堂に於て講演を為し、更に午後一時より仏教婦人会の為に再度の講演を東本願寺に於てなし、第四回を仁川商業学校に於て午後三時より一般鮮人の為に講演せり。

〔二八〕六月二〇日『京城日報』「井上博士の揮毫」

井上円了博士は九日夜、仁川より入京す。博士に揮毫を依頼せし方は成る可く九日夜中に京城ホテルにて受取れ度しと。

〔二九〕六月二〇日『京城日報』「開城より 国民道德普及会長井上円了博士」

開城より 国民道德普及会長 井上円了博士

〔前略〕爾来各所に於て、鮮人に対し日韓合邦の旨趣を説き、東洋の末路に当りて東洋の再興を計り得るものは日本の外に一國も無之、東洋の命脈旦夕に迫るの日に當り、極東の日本が独り回天の責任を荷うて東洋の命脈を伝ふるの位置に立ち申候。然るに、朝鮮は東洋文明の上より見れば、兄弟の間柄なれば兄弟相合して、回天の功を奏せんとするために、合邦の拳を見るに至り候。是れ天の使命に相違無し。今より朝鮮人は兄弟の実を挙げ、相扶けて此使命を達せざるべからずと信じ候由を諄々説き居候。拙者の主義は哲学館開設に際して賦したる拙吟

二首にて尽くし居ることも併説（へいせつ）□居候。

大道由来参教分、極東猶未喪斯文、從今富士峰頭月、照破泰西洋上雲、
廻々東風払雪吹、欧桃米李一時披、吾家別有老梅在、春満参千年古枝、

〔三〇〕六月二〇日『京城日報』「人事消息：井上円了博士」

井上円了博士 九日夜仁川より帰京。■旅館一泊。十日午前八時春川へ出発。

〔三一〕六月二一日『毎日申報』「開城・井上博士講演」

本月八日午前九時から開城公立高等小学校内で井上文学博士の国民道德の講演があつたが、松都面長久保田穰氏の斡旋により官公署外各学校男女生徒団体内鮮有志六百余名の聴者があり、全十二時に閉会したという。

〔三二〕六月二二日『毎日申報』「開城から、国民道德普及会長 井上円了」

※〔二九〕一九一八年六月一日『京城日報』「開城より 井上円了博士」の韓国語訳

〔三三〕六月二二日『毎日申報』「井上博士来鎮期」

過般に渡鮮し、各地に講演中である文学博士井上円了氏は、来る二十九日に来馬して一泊し、三十日に来鎮して松尾重信方、又は北辻一心寺に投宿し、両日に亘り精神修養の大講演を開催することのこと。

〔三四〕六月三日『京城日報』「井上博士日程変更」

各地講演の途にある井上円了博士の講演は、土地遠隔の故を以て、講演日程中より除きたる清津方面よりの依頼、当局に向つて頻々として来れるより三度旅程を変更し、南鮮を先きにし北鮮を最後とする事となれり。又南鮮地方に於ても日程中に加へ居らざる場所の申込多く、従て予定以上の時日を要す可し

〔三五〕六月三日『京城日報』「井上博士講演」

井上円了博士は十一日午後一時より進明女子高等普通学校に於て同校及び淑明女学校生徒の爲め約一時間の講演を為せり

〔三六〕六月四日『毎日申報』「井上博士講演」

国民道徳普及会長文学博士井上円了氏、既報の如く、去る八日午後六時に開城から来仁し、同夜八時半から赤愛両仁川委員主催下に両社員及び一般に講演を爲し、翌九日午前十時三十分から小学校で同校児童及び卒業生に対して講演を爲した後、午後三時から内里商業学校で同校生徒及び一般鮮人側に対して一場の講演が有つた。

〔三七〕六月二五日『毎日申報』「井上博士来全期」

過般渡鮮し各地を講演中だった文学博士井上円了氏は、十八日に来全し、全北公会堂において精神修養の一大講演を行う予定とのこと。

〔三八〕 六月一九日『朝鮮教育研究会雜誌』 心理的妖怪

※〔一九〕 五月三十一日『京城日報』「心理的妖怪（一）」、〔二〇〕 六月一日『京城日報』「心理的妖怪（二）」と同じ。

〔三九〕 六月二〇日『京城日報』「大邱：井上博士講演会」

井上円了博士は来る二十五日午後來邱、二十五日〔夜〕在郷軍人集会所における各宗連合会主催講演会、二十六日〔昼〕大邱公立小学校、同〔夜〕東本願寺にて講演をなす予定なるが、同博士の揮毫を望む向は予め大邱東本願寺、若くは増田商業会議所書記長迄申込むべしと。

〔四〇〕 六月二〇日『毎日申報』「論山：井上博士講演」

本月十六日、文学博士井上円了氏が■地に來り、同日下午九時から十一時まで戦捷の結果と戦後経営という演題で講演したという。

〔四一〕 七月一日『京城日報』「井上博士動靜」

井上円了博士は二十五、二十六日の兩日、大邱に於て講演したるが、二十二日朝浦項マに向け出發したるが、同地及び慶州に於て講演の上、二十九日大邱に引き返し、同日午後四時十四分發南急列車にて馬山に向へり〔大邱〕。

〔四二〕七月二日『京城日報』「井上博士著発」

井上円了博士は一日晋州来著、講演の上、二日出発せり〔晋州特電〕

〔四三〕七月五日『京城日報』「井上博士去来」

南鮮地方巡講中なりし井上円了博士は四日朝入京、直に元山方面に向け出発せり。

〔四四〕七月五日『毎日申報』「咸興…井上博士来咸乎」

国民道德普及会長井上博士は、総督府の囑託を受けて本月六日、来咸し講演する予定であり、道菱田一部長から、各官公署、新聞記者その他、内鮮民間有志多数に講聴を案内したという。

〔四五〕七月九日『中外日報』「釜山に於る井上円了氏」

去五月二十五日朝鮮総督府囑託として来鮮、国民道德普及の主旨にて各道巡歴中の井上博士は二日午後晋州方面より馬山府を経て着釜、直ちに公立第一尋常小学校に於て釜山教育会の為めに哲学上より東西両文明を比較論及す、「我日本は此新附同胞を指導し東洋に於ける唯一文明国として西洋文明に比敵せざるべからず」との意味を講演し、同夜は東本願寺に宿泊、三日午前、同寺信徒に対して平易なる道德訓話を試み、午後草梁鉄道倶楽部主催の講演会に臨み、余暇を以て一般揮毫の需めに応じ、夜行元山府方面へ出張せられたり、

〔四六〕七月二日『京城日報』「井上博士消息」

井上円了博士は十日来清、同夜小学校に於て講演し、十一日羅南鏡城に赴き、講演の筈なり〔清津特電〕

〔四七〕七月三日『京城日報』「井上博士動靜」

四日午後九時著元の井上博士は去る五日午前午後三回に亘り学校其他會議所に於て講演を為し、六日朝、陸路咸興に向へるが、十三日再び元山に引返し愛国婦人会員に対し一場の講演を為す予定なり〔元山〕

〔四八〕七月二五日『朝鮮教育研究会雜誌』三四号「国体の精華の説明」

国体の精華の説明

六月六日海州公立普通学校に於ける講演の要領

文学博士 井上円了

一 国民道徳は、教育勅語の御聖旨に尽き、教育勅語の御聖意は「国体の精華」一句を説明すれば足りると思ひます、古は東洋文明先起りて漸次之を西洋に及ぼし以て西洋文化の因をなしました。即ち現今の文明はその基を東洋に発し、西洋に発したのではありません。然るに今や西洋文明の進展は其の極る所を知らず、遂に一歩を遅れた東洋に逆流して所在東洋の文化を圧しました。又之を国勢上から観ても西洋の国勢は滔々として東洋諸国を來り浸し東洋諸国は或は之が為めに滅亡し、或は亡びざるも余息喘々たる有様で、その状恰も大洪水の來襲した如き勢であります。

而もその勢の絶東に及ぶや、我大日本帝国の在るありて大勢を堰き止めて東洋諸国を救つた様は、固く高き堤

防の洪水を防止せるにも似て、若し日本なくば東洋は終に西洋の蚕食するに委するの外なかつたでせう。日本は実に西洋東洋の大洪水を防止すべき万代不易の堤防で、此の堤防は又実に彼の教育勅語に示されたる 忠孝二道を以て築き上げたもので、この堤防がありたればこそ彼の恐るべき大洪水も防止し得たのであります。

私は東洋哲学を専攻しました。世界の哲学の源も亦之を東洋に発して、及ぼして以て西洋哲学を起しました。哲学上より考ふるも、余は東洋文化の命脈を如何にもして保たしめたく思ひます。今や車洋諸国の多く滅亡して西洋諸国の支配に属し行くを見れば、等しく東洋人たる吾人の奮然起ちて此の急に趨くは意気なくいいでせうか。而して実にこの望に副ふべきもの東洋諸国中我大日本帝国を措いて他に求めることが出来ません。我国が忠孝二道を以て国体を築いた故で此の二道こそ我国体の精華であります。

由来日本道徳は忠孝を本とす。諸の道徳是によりて起る。教育勅語にも諸徳を説かれたるが「爾民父母に孝に」と孝道に起して、「以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし」と、忠孝に結ばれたる所以は実に忠孝が日本道徳の本たるを示されたるに他ならないのであります。「展けば百徳、捲けば忠孝となる。或は言ふ、道徳の基は忠孝を超越したる天の誠なりと。広く世界に通ずるの徳の基は誠であります。勅諭にも「一の誠心は又五個條の精神なり」とも仰せられました。然しながら、此に顧ふべき事は、国民道徳と言つた事であります。「水は方円の器に随ふ」といふ諺があります。形なきは水の本性であるけれども、水は水で、しかも其の水は容器の形に随つて形を變ずること、人の熟知する所であります。徳も亦そうであつて、誠は正に徳の基であるべきですが、それは一定の形のない水の様なものであります。此の誠は各異なる形状を有する国に入つては又各々夫れに應ずる形状を占めなければなりません、即ち国異なれば徳亦当然異ならねばならぬ。天の誠は、我が日本に入つては忠孝為本の形を現はしたまでの事であります。故に我國民道徳に於ては、忠孝を本とすと断言していいのです。西洋

諸国と、我国とは風俗習慣を異にして居て、之を例へば一家の組織にも根本の差異があるのを見られます。即ち彼は夫婦を一家の本とし、我は親を本と致します。又西洋諸国は一国の道徳すべて人民本位の道徳にして、天子は人民の便宜の為に設けたものと言ふ思想から必然的に来る結果であると言ふことが出来ます。故に人民の便宜の為めには天子を廢立することをすら敢て怪まないのであります。我国は神聖にして冒すべからざる、又歴史を一貫して動かすべからざる 皇室を戴く、故に一国の道徳は此 皇室を中心とする忠孝を以て起りました斯の如く国民道徳は国の異なるにつれてその形を異にするものであります。

二 さて国の独立を確保するには、確固不拔の中心がなければなりません。日本は歴史を一貫して一系連綿万古不易の 皇室を戴いてをりますが、かくの如き確固たる中心は到底他に之を求める事は出来ません。余曾て南米 亜爾然丁に遊び、首都に文部省を訪ねました。普通学務局長は得々として説いて言ふに、愛国心養成の方法としては、小学校児童をして日々国家の表象たる国旗に敬礼せしめると言ひました。其実況を見ますと、授業の終了後、児童を玄関前の広庭に整列せしめ、玄関の上に国旗を掲げ、児童一同国歌を合唱し、終つて敬礼をして解散するのを見ました。諸国の中には、之に倣つて愛国心養成の方法となすものもあつて、其の苦衷は寧ろ憐れむべきであります。

翻つて思ふに、我国は実に斯やうな有様とは違ひます。我国には歴史を一貫して天壤と共に窮なき 皇室の儼として在すあり、之を中心として愛国心を養ふは勿論国旗や国家のもの企及すべからざる所、寔に他の模倣を許さぬ所であります。

南米に一小邦インカ帝国があります。アメリカインデヤンの建国する所、皇統一系連綿と続いてをりました

が、然も憐むべきは、西班牙の侵略で終に此一系国をして滅亡に到らしめました。爾来皇統連綿万世一系なるもの唯我皇室あるのみです。或は、西洋諸国に於ても国民よく團結して、今次の大戦乱に在りても忠君愛国の美風が發揮されつつあるのを見るではないかと言ふ人も有るかも知れませんが。誠にさうであります。而も西洋諸国が如何に其国民愛国心の涵養に苦心せるかに就いては余の実見した所を次に申述べませう。

會てフランスに遊び、首都パリを訪ねました。パリスの一公園にアルサスローレンの石像を飾り、其前に花環を供へたのを見ました。是アルサスローレンの死を意味し、国民をして其屈辱に悲しましめ、以てドイツに対する敵愾心を養はうとするのであります。又一パノラマ館には普仏戦争の際にパリスが独軍の爲めに包圍せられ、焼かれ、壊たれ、虐られてゐる実況を見せてをりますが、一老嫗の悲しんで泣くのを見受けました。ドイツにも之に類した実例を実見しました。ロンドン、トラファルガースコアにはネルソンの記念像があります。剣を提げフランスの方に向つて立つて居ります。是は仏の仇を忘れさせまいとするものであります。露国にも亦此に似た例があります。

然るに我国に於ては、三千年の歴史を一貫して動かすべからざる皇室がありまして、国民は克く之を中心として團結してをります。忠孝為本は窮極する所は忠道為本でありまして、忠道は又孟子の所謂浩然の氣、文天祥の正大の氣でありまして、天地に磅礴せる一の氣あり、呼んで正氣と言ふ。人其氣を享けて生れ、心之に通じ、実に広大無辺、神韻微妙、天地に充ち六合に漲つて居ります。此正大の氣を我等が享けて忠道に表はしたのであります。支那人は孝道の重んずべきことを知つて居るけれども、忠道あることを知りません。會て清帝崩御ありし時、民人悲しむものがない、政府は即ち各学校に命じて哭泣式を挙げさせた。其状況を聞くに、生徒一同を講堂に集め、校長壇に立ちて先づ高声にて哭泣一番すれば、生徒相和して泣くといふ、寧ろ滑稽に類して居ります。

が、此一例を以て見ても支那に忠道のないことを知るべきでせう。

明治天皇崩御の際に於ける我國民の悲歎を見る者は、何人が此の両者に霄壤の差あるに驚かぬ者がありませうか。先帝御危篤の報あるや、二重橋畔御全快を祈る者堵をなし、御登遐を聞きたる夕、御通夜を為す者亦数ふべからず。御大葬の日には、二重橋の辺は拝歎の人雑踏して喧擾を極めて居りましたが、而も午後十時、靈輦出御の号砲あるや、又咳嗽の声一つ起らず、靈輦の通御に際しては一人として泣かない者がありません。支那人は声に泣くのでありますが、日本人は溢れ出る悲に泣くのであります。

三 昨年、余の学校創立滿三十年祝賀会を催すに当り、陛下より御恩賜金を賜りました事に就いて、生徒一同〔東洋大学生三百人、京北中学生七百人、京北実業学校生三百人〕千三百人提灯を振り翳して二重橋外に整列し、君が代を唱へ終つて、沈黙五分間、万歳を三唱して御礼を言上しました。此の沈黙の五分間、千三百の学生は何れも一種言ふべからざる感に打たれ、落涙しない者は有りませんでした。此涙正しく不可思議であります。深く思へば、又決して不思議ではありません。我国は古来忠道為本を以て教とすること三千年、此道は祖先より遺伝して我等が心底に潜み、皇居に對し奉りて沈黙したる時、内より発して涙と溢れたのであります。此涙こそ日本人をして今日あらしめたる所以で、又忠道は天地正大の氣の我等に享けて忠道に発したものであります。

日本人が戦争に出づるや傷くも屈せず、一身を棄てて顧みず犠牲的精神の発露する所斃れて後已むの慨あり、之実に忠道の発揮である。この忠道あつたればこそ、西洋諸国東漸の大洪水を防止する堤ともなり、或は滅び、或は衰へたる東洋諸国の中に奮然止りて東洋の命脈の維持者ともなり得たのであります。

文明史上支那は我が親とも称すべきであります、今は衰へて既に古の意気なく、又古の盛時に復すべき見込

もありませぬ。例へば中氣を病む老人の如く、体軀徒らに彪大なるのみで他国の侵略に遭つても頗る無神経であつて、中氣の全快し得ない如く支那も亦衰亡の悲運から救ふことは不可能でありませう。唯文化の上に恩恵を蒙つた我国としては、一日にても長く支那を支持してやるのが義務であると言はねばなりませぬ。

故に将来の東洋の命脈を維持せんとせば、我国は支那との提携を必要といたします。此に於て朝鮮併合の真意義も亦自ら明かであります。今や文明史上兄弟の關係ある日本と朝鮮とは併合し、親とも言ふべき支那を支持して以て東洋の命脈を属し、相続を伝へむことは将来の我帝国の責務であります。

又已に両邦併合の上は我 皇室を中心として一致団結忠道を發揮し国体の健全なる発達を期せねばなりませぬ。已に業に相争ふの時ではありませぬ。斯しくて初めて支那に対する報恩の道を行ひ、天に答ふるの道を尽したと言へるでせう。実に余は此東洋に唯日本のみが独立して東洋諸国の擁護者たるは是れ天の使命を我に授けたものと観ないわけには行きませぬ。即ち内鮮人協力同心国勢の發展を致し以て東洋の命脈を継ぐは実に天の授けし使命に趣くものであります。是には忠道を以て基とすべきこと勿論であつて、此忠道こそ我國体の精華であります。教育勸語に宣はせられたる國体の精華とは即ち之を言ふのであります。〔了〕

〔四九〕 七月二五日 『朝鮮教育研究会雑誌』 三四号 「井上文学博士の講演日程」

——但括弧内の地名は講演地なり——

○五月二十四日（金）東京発

○同廿六日（日）京城着（京城）——二十七日（同）——二十八日（同）——二十九日、京城市内視察

○卅日（木）新義州（後、同）——卅一日義州（後、同）安藤県視察

○六月一日(土) 平壤(後、同)―二日(前、後二回平壤)―三日(後、同、鐵道主催)

○四日(火) 鎮南浦(前、同)―(同日平壤) 五日沙里院(前、同)―六日海州(前後二回同)

○七日(金) 開城―八日京城(前、開城)―九日仁川(前、後二回同)

○同十日(月) 春川(後、同)―十一日京城―十二日水原(前、同、後、鳥致院)―十三日清州(後、同)―十四

日公州(前、清州、後、鳥致院)―十五日同(前、後公州)―十六日論山(後、同)―十七日川崎農場(後、同)

―十八日群山(後、同)―十九日全州(同)―二十日裡里(同)―二十一日木浦―二十二日松汀里(同)―二十三日

光州(前、後二回同)―二十四日大田(夜同)―二十五日大邱(前、大田二回)

○二十六日(水) 大田(前、大邱後、同二回)―廿七日浦項(後、同)―廿八日慶州(前、同)―廿九日馬山―卅

日馬山(前、同、後、鎮海)

○同七月一日(月) 晋州(後、同)―二日釜山(後、同)―三日同(前、釜山、後草梁、鐵道主催)―四日京城

元山

○同五日(金) 元山(前、同、鐵道主催)―六日咸興―七日同(前、咸興、後、二回同)―八日船中―九日同―十

日清津(夜、同)―十一日同(羅南及鏡城)―十二日船中―十四日元山―十五日温井里―十六日同

○同十七日(水) 元山―十八日京城―十九日釜山―二十一日東京

〔五〇〕七月二〇日『毎日申報』「人事消息」

▲井上円了博士 十八日午後、釈王寺から入京。同夜内地に

〔五一〕七月三日『京城日報』「妖怪博士の朝鮮迷信談」

妖怪博士井上円了氏はこの間から総督府囑託として朝鮮各道を巡講中であつたが漸く行程を了へて十九日午後釜山から帰つて来た。早速朝鮮に於ける妖怪談を求めると博士は手を振り乍ら朝鮮は

◆迷信で固めた国だから

莫迦げたこと許りで

之はと思つた妖怪談も聞くことが出来なかつた、鳥渡した例を云へば、何処かの家に死人がある。すると早速陰陽師を聘し死人を埋める墓地の方角を見て貰ふ、若しその教へた地位方角以外の処に埋めるとその家は滅亡するといつて朝鮮人は◆非常に恐れてゐる。夫だから朝鮮の墓地は到る処に散在し、一家の墓でも一つは山の上にある、一つは夫から十里も離れた畑中にあるなど滅茶苦茶で、或る家では祖先の墓地を子供に教へるに三日もかかつたといふことだ。併しかう墓が散在しては第一その管理もつかず

◆総督府では曩に共同

墓地を作り死者は同所

に埋葬せしむることにした、所が迷信で固つた朝鮮人は共同墓地に埋めることを嫌がり、その結果として総督府は朝鮮人を亡ぼしその思想を消滅せしむる為め共同墓地などを作つたのだ、若命令通り

◆共同墓地に埋葬すれば家が亡ぶと、こんな馬鹿げたことを今なほ云つてゐるのだから困つたものだ。又墓の附近に木を植ることも忌嫌ひ万一その木の根が墓に達するとその家は滅亡すと云つて決して墓地に木を植えない、之等は先づ罪のない方とし、罪のある法では

◆朝鮮人一般に知識程度の低いのを得たり、賢しと彼れ等の恐怖するものを口実として種々の手で彼れ等を瞞

著するものがある。ツイ最近も朝鮮人の怖がる火の雨、石の雨を飛行機に結び付け独逸の飛行機が来て朝鮮に火の雨を降らせる、朝鮮は今に大変な目に逢ふから今のうちこつちでも飛行機を買、独逸の飛行機が

◆火の雨を降らさぬやうにしなければならぬ、夫には金が何万円と蒐る、就ては一株二十円とし、集まった金で飛行機を買、独逸に備へようと、甘く愚民を説き、シコタマ金を集められたものもあるが、これ丈知識の低い朝鮮人の事だから幽霊の話はザラにある、而し帰著する処は皆迷信が生んだもので、取るに足るものは一つもない〔門司〕

〔五二〕八月二五日『朝鮮教育研究会雑誌』三五号「東西両洋の文明について」

東西両洋の文明につきて

六月十日 春川公立普通学校に於ける講演の要領 文学士 井上円了

一 私は明治十一年に東京帝国大学（当時の東京大学）に入学した。其時は本科と予科と分れて予科は今の高等学校で、先づ順序として予科に入り、予科から本科に入る規定であつたので、私も予科に入ることになりました。其時私は深く感じた事があります。何故かと言ふと、教師と頼む者は全部西洋人で用語は皆英語で、学校の揭示及達し等の文章は悉皆英語であつて、恰も西洋の学校と同様の感じがしました。是れを見て東京大学は日本の大学に非ずして西洋の学校である様に思はれました。土地は日本の土地であるが、大学設立の基礎は皆西洋の風に基いたので、教師は西洋人、用語は西洋語、凡て西洋の物の様な感じがしました。日本の大学である限りは飽までも日本の大学でなければならぬ訳であるのに、西洋の物の様になつて居るので甚だ不快を覚えました。其

後学校が組織が変りまして、文学哲学等を加へることになつた。又西洋人の教師は契約の年限になれば解約することになつた。それで古典学仏教等を加へることになつた。仏教は即哲学であります。是れで漸く日本の大学らしくなりましたが、文科の附属でありました。大体大学の基礎を西洋に則つたのと私の入学当時は西洋崇拜の極端で、一も西洋二も西洋と日本の凡てを排斥せんとする様な傾向があつた。用語の如きも西洋語にし、美術、食物等全部を挙げて西洋に倣はんとした。味噌醬油の代りにスープや肉を食するとか、或は東洋の学問は学問に非ずなどと言ふものもありましたが、私は絶対に反対でありました。私は漢学、洋学、支那、印度の諸学を研究しました。大学にては支那、印度の諸学を研究する様になりました。それで卒業の上は、哲学館即東洋大学を設立しようと企てました。哲学館即東洋大学は、支那、印度の学問を普及する所で、哲学館は明治二十年に創立し、追々進歩して、今では支那、印度及日本の学問は西洋迄及ぶ様になつた。明治二十一年西洋に行つて、西洋の文学を研究し、西洋の学問の状況を見度いと思つて行き、益々哲学館の拡張に努めた次第であります。其の当時の感想を現はした詩があります。拙劣ではありますが紹介しますと、

三教〔神教、儒教、仏教〕

- 一、大道由来三教分 極東猶未喪斯文 従今富士峯頭月 照破太平洋上雲
- 二、処々東風払雪吹 欧桃李李一時披 吾家别有老梅在 春滿三千年古枝

私は愈々東洋大学の独立を謀ることに決しました。東洋の文学を眺むるに、文明と言へば、西洋文明の余沢である様に、文明は凡て西洋の物の様に思ふが西洋の文明は近世の文明でありまして、其源はギリシャであります。

東洋の文明は決して西洋の文明の後ではありません。西洋文明より見る時は一千年も以前の文明である。即ち東洋の文明は三四千年前、西洋の文明は二千四百年位のもので、東洋の文明は遙かに以前である。然し現今では、印度支那は衰亡して居るから已むを得ないが、西洋の文明は印度方面より浸入し普及した事確かである。例へば日月火水金土の七曜の如きも西洋から伝はつたものゝ様に思はれるが、決してそうではない。印度から伝はつたものである、と仏教の中にあります。西洋は印度より伝へ、日本等も同じく印度より伝はると同時に、西洋よりも伝はつたので、普通西洋からのみ伝はつた様に思つて居る。支那印度にては七つを以て物の極まりとして居る。分子が成立つても七つを以て基とし、死亡者の祭日の如きも七日くを以て営むを見ても印度が源であることが明かに分る。

二 それから論理であるが、論理はギリシャのアリストートルが元祖としてあるが、そうではない。アリストートルは紀元前三百年計りの人である。然るに印度は既に千年以前に於て論理が盛んであつた。論理とは即議論の事で、印度は議論の非常に旺盛な所であつて、当時は議論の角力と言つて居りました。議論ある時は大鼓を打つて何月何日何処に於て議論があるとフレを廻して知らせた。恰も相撲のフレ大鼓の様な訳である。

それで九十六種の学派の文士集合して議論します。議論するには定められた規則があつて、其規則によりて勝敗を審判するのである。如斯であるから、非常に論理の進歩した事は言ふまでもありません。論理とは名を異にするも日本の陰陽術〔因明術?〕である、ギリシアのアリストートルが論理の元祖といふ理由に付ては事情がある。アリストートルはアレキサンドルの師匠である。アレキサンドルが印度を攻めた時、種々の宝物と論理術とを引揚の際に土産として持帰り、アリストートルに贈つたのである。之を以て見れば、西洋より東洋が古い事が

証明されず。

私は哲学塔に三人の哲学の元祖を祭りたいと考へてをります。三人とは誰かといふと、支那哲学では黄帝〔堯舜孔孟は其以後である〕、約四千年前の印度哲学に於ける足目仙、此の人は論理学の発見者であつて、非常に智力の豊富な人で、足の先にも目があるとの事から足目仙と称へられた。又西洋哲学では約五千年前の「ターレフ」、此の人はギリシヤ哲学の元祖である。之を以て見ても東洋の西洋より古きことは明かである。唯に学問のみでなく種々の技術に於てもさうである。天文や数学はアラビヤより西洋に分子元素たる物理学の如きは印度よりギリシヤに伝はつたものであります。地動説の如きは、支那に於ては二千年前からの伝説である。其説に、太陽が動く様に見えるのは舟に乗つて舟の動くを知らないで、兩岸の動くが如く見ゆると同じであると伝へて居る。又火薬等の如きも古い発見である。

活字の如きは、西洋より以前に朝鮮に於て使用されてゐて、西洋は其余沢を受けて今日の文明を来したものである。今日の文明を分析すれば、其骨子となるべき柱石は東洋である。西洋は造作を加へたに過ぎない。

然るに其の文明の先駆者たりし東洋は何故に衰亡したかと言ふに、永い間眠つて居たからで、之に反して西洋は起きて働いた結果である。是に就ては原因がある。即ち東洋では世道人心に関係なきものは学問に非ず天文、物理等は雑料として卑んで居つたからで、それで西洋に占有せられたのである。西洋では人種の上に区別をして居る。西洋は白色人種、日本支那は黄色人種とし、白色人種を優等人種とし、黄色人種を劣等としてをる。私の洋行当時は非常に蔑視された。口には出さないが、其行動に於て卑んで居る事が明かであつた。日本には船などの無い時で、英国の船で行つた。船客は西洋人ばかりで東洋人は私一人であつた。船中で逢つても、東洋人は君許りだ」と言ふから私は「そうです」と答へた。私も腹が立つたから、歌を作つて見せた。其歌は「白金の中に

一人の黄金かな」と詠んで、英訳して見せた所が、西洋人等は妙な顔をして居たが、其後は私を見下げぬ様になつた。何故に東洋人が蔑視されるかと言ふに、西洋から東洋の大計は侵略されたのが原因である。僅かに土耳其、シャムが残存して居たが、殆んど勢力がない。

三 将来に於て、東洋は西洋のものになることを予想して居た西洋人も有つたが、日露戦争の結果、露国に打勝つたので西洋人は驚いた。西洋人は、東洋の黄色人種を最劣等の人種とし、到底白色人種の敵にあらずとし勝算なきものと断定して居たが、反対の結果を生じた。当時の在外邦人は、如何なる考を以て露国と交戦をなすかと、時々難問を受けた。又或米国人が、日光を見物して其風光の幽美なるを賞美して、日本の名所たるのみならず、世界の宝物なり、其宝物を惨酷なる露兵に破壊せられるのか、と嘆じて言ふ。然るに戦争の結果は百戦百勝、驚いたのも無理はない。それが為めに人種の問題が起つたのである。日本人は黄色人種であるが、純然たる黄色人種ではないのであらう。或は西洋人の血が混じて居るのであらう。乃木將軍は、必ず西洋人の混血だらうと言つた。然し種々研究した結果、露国に勝つたに就いて二原因を発見した。一は柔術、一は教育治国之である。戦争終結後、西洋では柔術の研究に力を注ぎ、或は教師を招きなどして盛んにやる。今では既に柔術は世界語となつた。私は或時濠州に行つた、其折南印度洋を横断し、半日間の航海中一の小島もない。汽船は英国船で、船客は三百人、東洋人否日本人としては私一人である。船客は皆退屈したので一同相談の結果私に柔術を教へて呉れ、相当の謝礼をするから、と申込んで来た。遺憾ながら私は柔術を知らぬので断ると、彼等は承知しません。日本では子供や女子でも柔術を知らぬ者が無いといふ事だから、男子たるあなたが知らぬ筈がない、と強硬に申し込んで来る。實際に於て知らぬので断つた。又英国から教育治国を見せて呉れと申込んで来たので、遽にわか

に翻訳して見せた所が、直訳の意味の徹底しない所もあり、西洋では忠孝の二道に重をおいてないので、こんなものは何にもならぬ。此の裏面には言外の意味があるに相違ないとの事で講師を招き講演を聞くことになつた。今は故人である菊地博士が行つて講演した結果、漸く其の一端を知る事が出来ました。日露戦争の勝利は独り日本のみ名誉でない。東洋全体の名誉である。若し日本がなかつたら、如何であつたらう。東洋の名誉所ではない。全部西洋の餌食になつたであらう。恰も西洋といふ大水は氾濫して東洋の文明名誉其他あらゆるものを侵略するのであつたのであつたでせう。極東に日本といふ堅固な堤防があつたために東洋の名誉は復活したのであります。東洋は三四千年前は、世界の文明を支配したが、現今の状況は実に慨嘆に堪へません。東洋は旧家、西洋は新家、西洋は大成金で大成金の新家の為に新家の宝物を買収されたのである。心ある者ならば悲憤慷慨せざるを得ません。若し之を思はざる者ありとすればそれは木石であります。支那は文明の中心である。我国の文明は支那の恩沢で、支那の文明は四十年前迄の文明を支配して居た。朝鮮も我国同様であつて、支那は凡て東洋文明の親である。日本、朝鮮の文明の親である。然らば印度は如何と言ふに、支那が七分、印度が三分位の割であるから、言はば叔父に当る訳である。然るに叔父は最早亡び親は正に亡びんとしつゝある。此時に当り、我々は大いに努力せねばならぬ事と思ふ。支那は、国は古い、土地は広い、人に例へて見れば恰も年老いて肥満した者の如く、能く中風に侵され易い即支那は、其中風に侵されて居る。中風と言ふ病氣は、身体麻痺して突いても捻つても痛痒を感じない。目下の支那の状態は正にそれで、列強から突かれても捻られても平気で居る。中風は到庭全治の見込はない。手当の結果、一二年の命を延すに過ぎない。それと同様に、支那の恢復も仲々の難事ではあるが、之を棄置くことは出来ない。介抱せねばならぬ。日本は血氣の盛んな壮年である。親たる支那が中風に罹つても幸に日本は壮年である。如何にしても東洋の文明を維持し而して東洋の再興を謀り、東洋の相続者とな

らねばならぬ是れ天の使命であると、私は思ひます。天道は公平である。東洋の將に全滅せんとするに際して、天は日本に此れの使命を与へた。其結果として日韓は合併された。日本と朝鮮とは、兄弟である。四経スベテに兄弟牆かきに闘せめぐも外其侮りを禦ぐ、とある。従来日本は朝鮮と兄弟喧嘩をした場合もあるが、目下の場合兄弟喧嘩をする時ではない。兄弟相愛して事に当らねばならぬ。儒教に兄は弟を愛し、弟は兄を敬すべしとある。日韓は相敬愛せねばならぬ。兄弟相敬愛し團結すれば、西洋の侵害も完全に防ぐことが出来る。之天の命これで天は東洋の相續者を残すべく使命した。故に之の命に基き相提携して国運の發展に努めねばならぬ。日韓の合併以来、朝鮮に於ては、或は威力を以て圧迫せらるゝの感を起すものもあるかも知れませぬが、之は已むを得ぬ傾向で、例へば板を合せるに膠にかわを以て合せ、其外を繩を以て緊縛して漸く付き合ふのを見て繩を解く。目下は即それで、是れは決して日本の為めではない。東洋の為め、否天の使命を完まっふする為め、相互提携して天の使命を完まっふすことに努められんことを希望します。

〔五三二 八月二日『毎日申報』「鮮人同化」(二)教育万能主義 井上円了博士談〕

△内地文明の余沢

本年五月下旬から七月上旬まで、二ヶ月間、朝鮮總督府の囑託により、十三道を一巡し九十一個処で内地人および朝鮮人に対して、国民道德の講演を行い、兼ねて教育宗教等の視察を行なつたが、余が明治三十九年に初めて渡鮮した當時と対照してみると、鷄林の事物は全然、別天地を作すが如きの觀がある。是の如く急速に面目を一変するに至つたのは、まったく朝鮮が併合により得た、内地文明の余沢であることは疑いない。併合以来、わずか七回の星霜を経るに過ぎざれば、その日はなお浅いといわねばならない。是の如く短い歳月間では実に驚く

べき長足の進歩である。朝鮮の併合は我が明治の維新に比すべきものであり、目下の現状は、明治八年頃と対照して考えなければならぬ。しかして、ある点では今日、内地以上のものであるが、たとえば鉄道の広軌、駅絡の広濶、電話、電灯、水道の設備、自動車の便利などは内地も及ばないところである。他の点ではなお今、すこぶる幼稚なことは、明治初年の内地と似ているところもある。これを平均して見ると、明治八年頃よりも幾歩を進めているようである。

しかし、これは外面の観察であり、もし内面から観れば、我維新前に類似するとも考えられる。右等の話は省略するが、ここに鮮人同化問題に就いて一言する。

△鮮人同化問題

鮮人は大概柔順であり、かつ温和な美風を有し、表面上では我に帰服したように見えるが、裏面にはどうかであるか、併合以来、七八年を過ぎず、とうてい彼をして衷心から服従するには至っていないであろう。ここにおいて、どうすれば彼我間に心底から融和するようにするかという問題が起きる。すなわち、彼をして速やかに我と同化する方法はどうかであるかという問題である。この点について、余は教育万能主義を取ることとした。まず政治上にあつては、併合以来、鮮人の生命財産がいかに安全になり、文明の恵沢がいかに福利を与えるか感得させることあるが、彼をして能くその恩を知了させるには、必ずまず教育により一般の知見を進め、智眼を開かせなければならぬ。

△教育制度、なお不備

鮮人は従来、書堂教育により文を学び、道を求めることを知ったが、今尚、その書堂が全道にわたり二万余が現存するといわれ、また凡百の教範が儒教主義であるが、師長を尊重する遺風がなお残り、併合以来、朝鮮の教

育は漸漸、改正され、内地の小学校に相当する者を普通学校といい、女子のほうを女子普通学校といい、内地の中学校に相当する者は高等普通学校といい、高等女学校を女子高等普通学校といい、既に中等程度の学校も数箇處に設置されたが、朝鮮全道から見れば、小学教育も寥然として曉星の如きである。

卑見では、まず普通学校を全国に普及させるようにし、都鄙の区別なく一人も不学の徒が無いようにしたい。所謂の義務教育を励行したい。これに達する順序としては、まず書堂を活用し、これを内地の分教場的にして書堂の教育に必ず普通学校の一年級二年級の課程を授けるように実行したい。今の書堂では千字文、小学、大学、論語のようなものを教えるだけで、これに加えて普通学校の初級を授けるようにし、且つ必ず内地語を学ぶようにさせたい。斯の如くして分教場的な書堂を畢えた後は進んで普通学校の上級に入る道を開けば、義務教育の実施を見るのは難しくはないと思う。

△国語の普及

同化問題の第一は言語の普及である。鮮人は語学の天才を有する点は実に驚くべきものがある。普通学校に入り、始めて内地語を学び、半年を経過すれば、自由に国語を聞解し、かつ自在に対話ができるというが、もし分教場的書堂を置き、書堂に在った当時から内地語を学ぶようにすれば、国語の普及に一層の進歩を見るのはもちろんであり、これに加え、教育を普及して鮮人の知見を進めるようにすれば、始めて文明の恵沢の感謝を自覚するに至り、併合前と併合後の相違も能く識別し、衷心から内地に向かつて感謝を呈するようになるのは疑いない。

〔五四〕八月二十四日『毎日申報』「鮮人同化 〔二〕教育万能主義 井上円了博士談」

△教育の向上発展

普通教育を普及させるに就いては向上発展の道を設置しなければならない。既に朝鮮では我が中学にあたるだけの高等普通は有るが、我が高等学校にあたるもの、又た大学にあたるものは無い。鮮人の教育としては高等普通が終局の教育であった。元来今日は高等普通学校までも大都会にしかなく極めて少数であるから高等学校の必要は無いという論もあるが、今後、将来の計画を定め、その理想を鮮人に知了させておくのが最も必要である。まず今後の方針としては年々高等普通学校を増設し、その校数が若干に達したら、高等学校を設け、更に進んで大学を設ける事を予告しておきたい。朝鮮はその面積の大なることは内地の本土と大差が無く、その人口が一千万六百万ある以上は、高等学校は無論、大学もあるのが当然である。ただ今日は教育の施設がまだ日浅いために大学を設置するのは尙早であることは疑いないが、朝鮮の学制としては幾年後、あるいは教育の普及が一定の程度に達した場合には、まず高等学校を設け、更に進んで大学を開くことを予定し、鮮人に教育上、向上発展の道があることを予知させることが、その実、普通学校を普及させるに就いても非常な奨励となると思う。

△高等教育の組織

朝鮮の高等学校や大学や内地のものとは多少その内容を異にする必要が起るであろう。なぜならば、民情人心を異にする以上はこれに適応した学制を設けなければならぬからである。故に小学校を普通学校と称する如く、高等学校は朝鮮高等学校と呼び、朝鮮の民情人心に相応した組織学科を置きたい。まず鮮人としては語学の天才を有することと共に技術の天才があり、その外に文学の方は従来の儒教的教育の影響で大いに好む風が有るという。依って大学を設けるならば、その天才と嗜好に依じて工科大学、医科大学、文科大学を最初に開設した

い。高等学校も工科文科の二方面に重きを置けばよいと思う。

△教育奨励方法

又た人は何者を問わず、名誉を貪る情の無いものは無い。朝鮮人も名利を望む情は他邦人より優ることはあつても決して劣らないものと余は思う。故に教育を奨励するについては、その前途の有望なることを知らせ、大学卒業の者には学士学位を授けるだけでなく、社会上の待遇法を設ける事、官に就いても何官以上は大学卒業の者に限り、就職することを得るといふ等、特別の規定をおく必要がある。

〔五五〕八月二七日『毎日申報』「鮮人同化〔三〕教育万能主義 井上円了博士談」

△儒教を尊重

朝鮮は古来から儒教本位であり、尚今孔子を尊崇する国風であれば、学校教育の倫理は儒教に重きを置くだけでなく、教育勅語の忠孝を説くにも、一つ一つ四書五経に考証することが必要である。その中、各道の都会には大抵、聖廟があり、積奠の時には政府でも相当なる官吏を派遣して敬意を表するようにし、各学校ではその日の授業を休み、生徒を聖廟に参拝させ、聖廟がない地方では学校内に毎年一回、積奠せきでんを挙行するようという。このようにして、国民としては神社を尊崇し、人類としては聖廟に敬意を表することを知らしめるのがよい。

△同化融和の捷徑

この方法によれば、鮮人をして速やかに同化融和の実績を上げさせることは疑いない。まず教育を普設し、言語の普及を計り、彼我間の人情を疎通させ、かつこれによつて鮮人の知見を進め、文明の恵沢が実に感謝すべき

ことを知らせ、その恵沢が、すべて併合の賜物であることを感じさせなければならぬ。また下に広く普通教育を奨励することは、上に向上発展の道を設け、小学中学を卒業すれば進んで高等教育、大学教育に就く道があることを知らせる必要上、今後、朝鮮大学を開設する事を予告しておきたい。故に、今後の朝鮮でまず第一の着手として、教育万能主義を取るようになることは、余の主唱する点である。

△宗教振興も急務

教育の外に宗教の振興を計ることも朝鮮の急務である。今まで朝鮮の僧侶は一般に賤視され、仏寺は有るが仏教の感化は皆無の状態である。故に鮮人は儒教の形式を守り、父母を重んじ、祖先を貴び、一家を愛する風があるが、理性的、高尚の趣味を欠いている。もしその趣味が無ければ、人はついに体欲物欲の奴隸になるほかない。故に鮮人をして、その理性に進めしめるためには、教育の向上と共に宗教の改善が必要である。

△鮮人僧侶の教育

朝鮮には併合前から各種の耶蘇教が僻地まで侵入している。真実な信者はきわめて少ないというが、その一の原因は、耶蘇教が朝鮮の国風に適合しないためである。朝鮮の仏教は祖先崇拜の風に適し、今後、鮮人の僧侶を教育し、人民を指導するようにならなければならない。朝鮮の宗教に就いては、色々と論ずることもあるが、これは他日の問題とし、ただ目下の急務として教育万能主義を實行するということだけに止める。

右は余がわずか六〇日の間に視察し得た浅見なれば、井蛙の管見に過ぎない。朝鮮の当局者には、これに倍する先見の明があることは疑われない。余も無用の贅言であることを知りながらも、「愚者の千慮も必ず一得有り」の古諺もあるので、卑見のまま開陳した。〔完〕

〔五六〕一〇月二五日『教育時論』一二〇七号「朝鮮視察管見 文学博士 井上円了」

一 余は朝鮮総督府の囑託により本年五月下旬から七月下旬迄二個月間朝鮮全道を一巡し、九十一個所に於て内地人及朝鮮人に対して国民道徳の講演を為し、旁ら教育宗教等の視察をした。余が始めて朝鮮へ行つたのは明治三十九年であるが、その当時と今日とを対照すると鷄林の事物は全く別天地の觀がある。朝鮮が斯く速かに面目を一変するに至つたのは全く併合によつて得たる内地文明の余沢に外ならぬので、或る点に於ては今日の内地以上の進歩したのものもある。例へば鉄道の広軌、駅路の広濶、電話、電灯、水道の設備、自動車の便利などがそれである。然し他の点に於ては今尚頗る幼稚であつて、丁度我が明治初年頃とひとしい所もある、それで之を平均して見ると明治八年頃よりも幾分か進んで居る方であると思ふが、然し是れは外面の觀察であつて、若し内面から視ると我維新前に類するやうにも考へられる。

二 朝鮮の教育制度は併合以来漸々改正せられ、現在では小学校は勿論、中等程度の学校も設置されてある。然し内地人の行く学校と朝鮮人の行く学校とは全く區別され、従つてその名称も異にして居る。即ち内地人兒童が受ける初等教育の学校は、内地同様之を小学校と称して居るが、朝鮮人の兒童の受けるそれは普通学校と称して居る、又中等程度の学校でも内地人の子弟の受ける学校は内地同様之を中学校高等女学校と称して居るが、朝鮮人の子弟の受けるそれは高等普通学校、女子高等普通学校と称して居る。それで總督府の方針では此等の学校を鷄林全道に普ねく設置したいといふのであるが、何に致せ併合以来僅か八年の星霜を経、日のまだ浅い時であるが為に、現在では、普通学校は重なる都会地だけに設けられ、高等普通学校、女子高等普通学校の如きは僅かに道庁の所在地にのみ設立されてある次第である。それで一般の教育はといへば昔時我が国で行はれた寺子屋式で

ある。

三 朝鮮では寺子屋式教育を施して居る所を書堂と称して居る、而して此の書堂は朝鮮全道到る処の部落に在つて、一書堂の生徒は十人乃至十二三人である。それで四畳か六畳位の倭小な汚い座敷に机を並べ、千字文、小学、大学、論語、孟子、通鑑などを教へて居る。しかもそれが一人／＼個々別々で其上音読であるから、その喧しいことといつたら夥しい。又朝鮮人は室内に居る時は安座^{アゲラ}で、即ち足を組んで座つて居るのであるが、貴人の前では立膝をするのを礼としてある。それで此の書堂の児童は先生の前であるという処から、立膝をして例の音読をやつて居る、特に奇観なのは、音読しつゝ身体を前後に動かすことで、どの生徒も身体を動かしつゝ大声を張り上げて読んで居る。この体を動かすことは何の理由であるか分らぬが、或は勉強に倦まない予防と一は身体の運動になるといふ意義から起つたものでは無いかと思はれる。それで先生はと見れば、長い竹の棒を持つて居て、それで字を指しつゝ教へて居る。又その教へる時間はといへば、朝から晩方まで、休憩は昼に一寸食事に帰るだけで、帰つて来ると又例の鷺鳥式運動を繰り返すのである。又此の書堂の修業年限は何年であるかといへば、十ヶ年であつて、実にのん気なものであるが、大抵の生徒は二三ヶ年で止めるといふことである。又授業料は一人一ヶ月二十錢位であるが、先生は此外に生徒から、米、野菜等の進物があるから、兎に角暮して行かれるのだといふことである。又此の書堂に学ぶものは、男子ばかりで女子は一人も居ないのである。何故に女子は居ないかといへば、これは女子の就学を拒絶するのでは無く、朝鮮人は女子には文字は絶対に必要なしとして入れないのである。それで朝鮮人の児童で此の書堂の教育を受ける者が全人口の約半数はあるといふことであるから、他の半数は無学文盲である。

四 朝鮮には上述の如き書堂が到る処の部落に在つて、子弟に文字を授けて居るのであるが、かゝる内地と異つた教育を施すことは、啻に今日の時勢に適應しないばかりで無く、又此の書堂教育そのものは、朝鮮人に排日思想を吹み込む虞が大にあるのである。故に総督府でも夙に此の点を憂ひ、今は多大の注意を払つて居るから何とか応急の処置をすることと思ふ。

卑見によれば、此の書堂を普通学校の分教場的のものとし、書堂の教育には必ず普通学校の一年級の課程を授ける様にすることが、尤も機宜に適した方法であらうと思ふ。かくて分教場で一学年を卒へたものを、普通学校の二学年に編入する様にしたならば、義務教育を全道に普及するの捷徑となるのみならず、教育の統一が出来、一挙兩得の策と信ずるのである。勿論総督府では此の寺子屋式書堂を普通学校にする方針であるらしいが、それには経費を要するから、今俄に之を實行することは出来ない様である。余の調査した処では朝鮮全道には、此の書堂の数が約二万ある、而して卑見の如く此の書堂を先づ普通学校の分教場とすると仮定し其先生に一ケ年百円の手当を支給するとしたならば一ケ年の総経費は二百万円である、此の二百万円は一見多額の様であるが、国家百年の大計から打算すると左迄高価で無いばかりで無く、これによつて却つて彼の忌むべき排日思想をも自然に滅絶させることが出来ると信ずるのである。

五 朝鮮で今一つ排日思想を鼓吹すると思はれる学校は外国の宣教師が建てた学校である。御承知の如く、朝鮮には元、一の学校も無かつたから、彼等外国の宣教師は、朝鮮人に文明の教育を授け、文明の医術を施すといふのを看板として、先づ都会に学校を立て、それから段々と田舎にも及ぼし、多大の資金を投じ盛んに校舎を建築して生徒を吸集したので、現在では中等程度の教育を授けて居る学校もある。而してこれ等宣教師の中では英仏

人よりは寧ろ米国人の方が多く、又朝鮮人で日本をいやがる連中は自然に此に集まるのである。それで此の学校は排日思想養成所の觀があるので、総督府でも早くからこれに気付いて居て、学校として宗教を授けてはならぬ、苟も日本帝国の法律の下に立つて居る以上は、日本の教育勅語に基いて教授せねばならぬと厳達して居る有様である、要するに此の宣教師の学校と彼の書堂とを改造せぬ以上は朝鮮人同化は前途尙遼遠である。

六 朝鮮人は辞令に巧みで、お世辞のうまいことは天下一品であるが、然し、口と心とは正反對で、決して日本に心服して居ないのである。それで朝鮮人にかゝる思想が漲みなぎつて居るのは余は朝鮮の国是が産んだ結果であると思ふ。朝鮮は地理上支那と日本の間に挟ままつて居るから、彼等は強い国に上手に取り入り、之をごまかしさへすればよいといふ主義を、古来唯一の外交手段として来たのである。漢江の上流に春川といふ景勝の地がある。こゝは今は立派な道路も開けて交通の便もよいが、以前は中々要害の地であつたのである。そこで朝鮮人は例の事大主義から割り出し、若し大国の怒りに触れ、京城が攻略された暁には、この春川を以てその蒙塵の地と予定して置いたといふことである。此の如く朝鮮人は外国から攻め込まれた場合には之れに抵抗する考も無く、先づ逃げ込む土地を予定して置いたといふのは、畢竟逃げ込んだ後、更らに御機嫌を取つて甘くごまかさうといふ考に外ならぬのである。かゝる国是が今日の朝鮮人を作り上げたのである。

又朝鮮人は支那が大国である処から、以前は頻りに之を崇拜し日本を馬鹿にして居たのであつたが、一朝支那が日本に負けた暁、掌の裏を覆すが如く之を棄て日本に依頼した。其後我が日本と露西亜とを比較して、日本は小国でとても露国には敵はないと信じた結果は、更らに日本を棄て、露国崇拜となつた。それで彼の日本海の大戦で日本が大勝を博した事なども彼等はその勝利の報が伝つてから二ヶ月の後迄も信用しなかつたといふ話であ

る。かくていよく日本が露国に勝つたといふことを知つてから、日本より強い国は外に無いと信じ遂に日本に服して現今に至つたのであるが、此の頃又欧州戦争で、独逸が強いといふ噂を聞いたために今度は独逸に心を寄せて居る傾がある。それは罪人が死刑になる場合、死んで鬼となり、独逸を助けて日本を滅ぼしてやるといふたことに徴しても明である。彼等の精神はかゝる状態であるから、将来米國若しくは英國などを強いと信じ段々に畏敬する様になることは、彼等の過去の事實に顧みて明であるから、当局者も今から充分之れに対する要意が必要である。それには先づ彼の書堂や、宣教師の学校を処分せなければならぬと思ふ。

七 朝鮮に対する今日の急務は同化問題であるが、この問題の解決は内地語の普及で無ければならぬ、ところが此に幸いなことは、朝鮮人は驚くべき語学の天才を持つて居ることである。今日迄の経験によると、兒童が始めて普通学校に入つて内地語を学ぶと、半ヶ年位で優に内地語を聞き分け、且つ自由に之を話すことが出来るのである。故に彼の書堂を普通学校の分教場とし、彼等の子女をして一定の年齢に達すれば必ずこれに入れる様にしたならば、茲に内地語の普及が出来、従つて意思も疏通することになるから、同化の実を挙ぐることは容易に出来ると思ふのである。

それから朝鮮人の女子であるが、既に前に述べた如く、朝鮮人は、女子には学問は不必要として之を書堂に入れぬのであるから、朝鮮の女子は、一部上流の婦人を除く外は、概して無学無教育である。それで朝鮮の女には昔から名前が無く、嫁入りしてから後、初めて実家の姓を以てその名とするのである。これは碑文などを見るとよく分ることで、母は何氏と書いてあつて、その名を記してないのである。惟ふにこれは支那から伝はつた習慣で、支那でも昔から女には名が無かつたのである。彼の孔子の伝にも父の名は明らかに叔梁紇としてあるが、母

は単に顔氏と書し、顔といふ姓の人であるといふだけで名が無い。此の点から見ると日本の漢学者が碑文を書く場合に母の名があつても之を書かないで、その実家の姓を称して何々氏とあるのは、寧ろ滑稽の感を禁じ得ぬのである。話は大分横道へ入つたが、然らば朝鮮の女は全く名が無いかといへば、そこは又重宝なもので、其家だけの符牒があるのである。例へば中流以上では花とか春とかと称し、下等階級になると、犬、猫、又は犬フン、猫フンといふ様な符牒がある、然しこれはその一家内だけの符牒で他人には決して分らぬといふことである。そこで此の女に名を付けないといふことも、女は家に居るもの、外に出る者で無いといふ処から、自然に名の必要を認めなくなつて来たのであると思ふ。だが今日では此の風習は大分無くなつて来て、中流階級の所謂紳士社会は旧慣を打破して女子の外出を許したから、女子も喜んで学校へ行く様になつて来、従つて今ではその名も秘密的の符牒では無く、天下晴れての名があるのである。

私は京城で朝鮮の女子を收容してある高等女学校程度の私立学校を参観し、生徒の製作にかゝる手工品を觀たが、概して上出来なものが多かつた。そこでこれを学校の人に聞いて見ると、朝鮮女子の手工的技術は、その語学の天才と相待つて、末頼母しいものがあるといふことであつた。又此の学校では放課時間を午後四時と規定してあるが、生徒は日の暮れる迄学校に居て容易に帰らない。その理由は家に帰つて窮屈な所に居るより、学校で自由に遊ぶ方がよいといふのである、又此の学校では暑中休暇に苦むといふことで、それは生徒が休暇で家に居ることを好まないからだといふことである。これは中流階級の子女の事であるが、これで見ても朝鮮子女の一斑を卜することが出来るから、将来は日本語と共に此の技芸を助成する途を講ずることが必要で、これも亦同化の一手段であると思ふ。

八 なほ朝鮮人同化の途は儒教である。古来朝鮮は儒教本位の国で、今尚孔子を崇拜して居る。それで今日迄の朝鮮の道徳は此の儒教が土台となつて来たので、此の点は内地と其の趣を同じくして居る。然し朝鮮の儒教の現況は只形式に捕はれて居るばかりで、丁度蟬のぬげがらの様なものである。例へば斬髪を奨励しても、身体鬚膚こ之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始也との説を固守し、髪を斬ることは身体を毀損するので即ち孝で無いと信じて居る類で、全く形式に流れて居るのである。然し本来が儒教の国であるから、之を利用して、益その道徳を向上させることが必要である。それには先づ学校教育の倫理には儒教に重きを置くのみならず、勅語の忠孝を説く場合にも、一々四書五経に考証し、儒教と勅語とは同一の趣旨であるといふことを、彼等の頭に徹底する様にせねばならぬと思ふ。又朝鮮の各道の都会には大抵聖廟があるから、積奠せきてんの時などは政府から相当の官吏を派遣して敬意を表するやうにし、各学校では其日の授業を休み、生徒をして聖廟に参拝せしむるやうにし、聖廟のない地方では学校内で毎年一回積奠を挙ぐるやうにすることなども又尤も彼等を同化する便法であると思ふ。

九 今一つ見逃すべからざることは仏教である。朝鮮の仏教は高麗朝時代には非常に隆盛であつたのであるが、李朝になつて儒教を入れたために衰頽を來たし、爾来今日に到る迄仏教は僅かに下等社会に信仰を持つて居るだけで、上中流階級の人は之を以て一種の迷信と為し、寺院に参詣することを嘲つて居るのである。嘗て朝鮮觀光団が京都の本願寺を觀ての土産話に、日本人は迷信の強い国民であると評したといふことであるが、此の一事は以て彼等の仏教觀を伺うことが出来る。かゝる次第であるから、朝鮮の僧侶は一般からは賤民視せられ、仏寺があつても仏教の感化は皆無である。然し何れの寺院でも不動産を持つて居る、大本山になると二三百人の門弟を養つて居るのもある。

前に述べた通り朝鮮の仏教は李朝になつて衰微したのであるが、その寺院の裕富であるのは何故であるかといふに、寺院は景勝の地に建てられてあるから、朝鮮の紳士は酒肴を携へ、芸者を擁して此に遊びに行くのである。故に朝鮮の寺院は内地の料理屋の如き性質を有し、玉山既に崩れて杯盤狼藉はいばんろうせきの醜を演じたり、或は徹夜の詩会を催し、風流韻事に日を送る者もある。それで寺の収入は莫大の金額と為り、それが積つて今日の大を成し、弟子を二三百人も養ふに至つた次第である。総督府でもこの仏寺に注意し、僧侶の教育に就いても苦心して居る様であるが、卑見によれば朝鮮も内地と同じ宗教であるから、この僧侶を養育することは亦同化の一方便であつて、我が東洋大学なども、此の方面に活動して貰ひたいものである。

一〇 朝鮮人の智識の程度が低く且つ猜疑心のあることは想像以外である。今その一例を挙げると、彼らは自動車自動車の走るを見てもそれが科学的の動力であることを知らず、多数の犬が中に居つて引つ張つて行くと信じて居る。又朝朝あさあさ人は稲を植ゑる時、水田に水を引く場合には、長い大きな木に溝を穿ち、それを足で踏んでやつて居て、頗る原始的の観がある。それで内地人が便利な水車を貸してやつても、決して之を使用しない。段々その理由を聞いて見ると、彼等は之を悪意に解し、水車で水を入れて稲がよく出来ると税金を多く取られると思つて居るといふことである。此の外これに類した例は沢山あるが、要するに朝鮮人は智識の度が低く文明の利器を見ても左迄便利とも感ぜず、之れが為めに反つてその猜疑心を増すといふ様な傾向がある。故に朝鮮人の指導は一層の親切と努力とを要するのである。

一一 以上は朝鮮を視察した大体の話であるが、私は朝鮮人をして早く同化融和の実績を挙げしむるには、先づ

教育を普及して内地語の普及を計り、彼我間の人情を疏通せしめ、且つ之によりて鮮人の知見を進め、文明の恵沢の真に有難いことを知らしめ、其恵沢は全く併合の賜物なることを感ぜしむるに在ると信するのである。かくして朝鮮人が文明の恵沢の有難きことを自覚すると、自然に併合前と併合後の相違もよく識別することが出来、衷心より日本に向つて感謝を呈する様になるのである。此の点から見て私は教育万能主義を主張するものである。

下に広く普通教育を奨励し、上に向上発展の途を設け、小中学を卒業すれば進んで高等教育、大学教育を受けることが出来るといふことを彼等に知らしめる必要上、私は今から朝鮮大学を開設することを希望するものである。そしてその大学も、朝鮮の国風に適したものの、即ち文学、哲学、医学、工学等が宜しからうと信するのである。

以上は余が僅かに六十日間の視察から得たる浅見で、固より井蛙の管見に過ぎぬのである、然し愚者千慮必有一得との古諺もあり、又岡目八目の俗言もあるから、茲こゝに遠慮なく開陳して識者の参考に供した次第である。〔文責在記者〕

【註】

- (1) 円了の朝鮮巡講についての研究論文としては、朴慶植「井上円了の朝鮮巡講の歴史的背景」(『井上円了研究』第七卷、一九九七年)、許智香「井上円了と朝鮮巡講、その歴史的位ち置について」(『日本思想史学』四五、二〇一三年)、三浦節夫「井上円了と東アジア(一)」(『井上円了研究センター年報』二三、二〇一四年)がある。
- (2) なお、今回収録できなかった論文としては「朝鮮所感」(『修身』四(一)、一九〇七年)、「朝鮮紀行」(上)(『東洋哲学』二五―一一、一九一八年一月)、「朝鮮紀行」(下)(『東洋哲学』二六―一二、一九一九年二月)がある。